

「本当の友となる」

台湾宣教師 伊藤 初



この三人の中でだが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」彼は言った。「その人にあわれみ深い行いをした人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って、同じようにしなさい。」
ルカ10・36、37

今私が奉仕をしている台湾の教会では、関係性を大事にした伝道を行っています。ここ数年、感謝なことに多くの教会員の家族や友人の方々などが救いに与ることが出来ました。私と一緒に言葉の勉強（私が相手の方に日本語を教え、相手の方が私に中国語を教えるやり方）をしている友人も教会に来てくれるようになりました。

このことを通して、私たちの宣教は、まず周りの人と関係を築いてゆくことから、始まって行くことだと改めて思いました。それは、時間がかかるかもしれませんが、私たちがまず周りの方々に対して「良いサマリア人」のような本当の友となつて、その中で神様の愛を伝えて行くこ

とが、私たちの宣教の最も基本的なことだということをお自身も一度教えられました。

聖書の福音を頭で理解していただくことも大切ですが、それと共に、私たちの言葉や行いを通して、神様の愛を心で感じていただくことではないでしょうか？

台湾の教会ではよく、「やりすぎてこそ、その人を本当に感動させることができる。」と言われています。もし私たちが誰かを助けたり、誰かの必要に答えたりする時、もしそれがその人の必要、その人の求めに足りないものであったら、私たちの労力は実を結ばないものになってしまいます。もし、その人の必要にちょうど良い程度のものであったのなら、それはその人の必要には応えていますが、まだその人を本当に感動させるには至りません。その人の必要に対して、その必要以上のものを私たちが支払ってゆく時、その人の求めに答え、そのうえでその方を感動させることができるということなのです。

これは、私たちにとって一つのチャレンジであると思います。「あなたも行って、同じようにしなさい」という主の言葉にいつでも従って行けるよう共に祈ってまいりましょう。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
カリキュラム解説	4
教師養成講座「神様の子どもを育てるために(2)」	5
―幼な子とともに生きる―	9
復活	15
キリストの宣教	15
サムエルと王たち	51
牧羊ひろば(苦小牧小羊伝道所)	87
「牧羊者」のご購読・ご利用について	88
おわりに	88

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」(以上、日本キリスト教団出版局)、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」(日本ホーリネス教団出版局)、イン：「教会学校さんびか」、イン新：「教会学校さんびか 新版」(以上、インマヌエル教会学校部)、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」(以上、日本児童福音伝道協会、PW：「プレイズワールド」(リビングプレイズ)



●復活

行事 テーマ 聖書 暗唱聖句

4月7日 進級式 共におられる マタイ 28:16～20 同20節
との約束

●キリストの宣教

4月14日 イエスの受洗 ルカ 3:15～22 同22節

21日 荒野の誘惑 ルカ 4:1～13 同4節

28日 弟子への招き ルカ 5:1～11 同11節

●サムエルと王たち

5月26日 幼な子サムエル Iサムエル 3:1～14 同9節

6月2日 ダビデの Iサムエル 16:6～13 同7節
油そそぎ

9日 花の日・空の鳥・ マタイ 6:25～34 同28節
子どもの花

16日 父の日 マタイ 7:7～12 同11節

23日 ソロモンの知恵 I列王 3:16～28 同28節

30日 王国の分裂 I列王 12:1～19 同14節
箴言

5月5日 罪人を招く ルカ 5:27～32 同32節

12日 母親の日 ルカ 2:41～52 同51節

19日 ペテロの告白 使徒 1:3～8 同8節

二〇二四年度 カリキュラム解説

今年度のカリキュラムは基本的には二〇一七～二〇一九年の三か年カリキュラムの二年目を元にしています。そのため、以下、二〇一八年度カリキュラム解説を元に、一部加筆修正して、今年度カリキュラムの概略についてご紹介致します。カリキュラムは教会教室ホームページからダウンロードして頂けます。

①旧約聖書

旧約聖書からの学びは、サムエル記から歴代誌第二まで（単元「サムエルと王たち」とヨシヤ記（単元「ヨシヤ」）、詩歌と呼ばれる諸書（単元「詩歌」①と②）を扱います。単元「サムエルと王たち」は、イスラエル・ユダ王国の歴史からの学びです。教師の側でも歴史的経緯をよく頭に入れた上で、お話しください。詩歌は、文学形態を踏まえた上で、語られている内容を分かりやすくお伝え頂くとよいでしょう。

②新約聖書

新約聖書は、単元「復活」（前年度カリキュラムからの

継続）以外は、ルカによる福音書を中心に学びます。単元「キリストの宣教」、「キリストと出会った人々」、「キリストの譬話」に続き、「クリスマス」単元をはさんで、単元「キリストの十字架への道」へとつながります。聖書辞典等でルカによる福音書全体の特徴を確認しておくとい良いでしょう。

③教会暦・年間行事によるカリキュラム

昨年度末の単元「十字架への道」に続き、今年度初めには、イースターに合わせて、単元「復活」が置かれます。また、年末には、収穫感謝の日を含め、単元「クリスマス・年末」が置かれます。

④テーマ「キリストの救いを知る」（マルコ・15）

今年度のテーマは「キリストの救いを知る」です。福音書その他の学びの中でも、キリストの救いを扱っています。加えて、夏のキャンプ時期に合わせて「救い」というテーマ単元を設けました。一人一人が確実にキリストの救いに導かれますよう、祈りつつお取り組み下さい。

神様の子どもを育てるために(2) —幼な子とともに生きる—

後藤 真



全体の目次

前号(二〇二三IV)

I、今、信仰共生を —信仰共生についての問題意識

II、聖書に見る信仰共生

今号以降(二〇二四I) *次号以降もこの連載が続きますので「今号以降」と訂正しております。

II、聖書に見る信仰共生(前号の続き)

III、幼い魂とともに —信仰共生の課題と取り組みのヒント

IV、神様との出会い —私の原点についての証

II、聖書に見る信仰共生(前号の続き)

④聖書に親しむ

テモテについてパウロは次のように言っています。

…その信仰は、最初あなたの祖母ロイスと母ユニケのうちに宿ったもので、それがあなたのうちにも宿っていると私は確信しています。(IIテモテ1:5)

テモテはロイスというおばあさん、ユニケというお母さん

から続く三代目の信者でした。テモテへの手紙が書かれたのは一世紀。教会が生まれて間がない時代ですから、一代目の信者か、家族ごとに信者になった人が圧倒的に多かったと想像できます。祖母と母が信者だった三代目のテモテは当時珍

しい存在ではなかったかと思えます。

テモテは、異端や間違った信仰が入り込んでいた初期の教会にあって、福音を正しく受け止め、信仰を宿し、若いながら、働き人、指導者として立てられていました。

このテモテはこのような信仰をどのようにうちに宿したのでしょうか。次のようにあります。

また、自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。(Ⅱテモテ3・15)

しかしここで強調されていることは、幼い頃から親しんできた聖書が、テモテに救いの知恵を与えたということです。

子どもたちがふだん何気なく目にするものは、情緒や教育のために良いものもありますが、そうであっても、決して救いに至る知恵を与えることはありません。聖書だけが、救いを受けさせる知恵を与える書物です。ふつう日本の家庭には聖書がありません。けれども信者家庭には必ず聖書があります。聖書アプリも無料で手に入ります。救いに至る知恵が、生活の中にあるのです。

堺栄光教会では長らく続けてきたことがあります。それは

子どもたちの聖書輪読です。かつては教会学校の時間に、現在ではキッズ・アガベと呼ばれる子どもたちのための時間に、聖書の一定の箇所をその日集まった子どもたちと大人たちで一節ずつ輪読するのです。

文字が読めない子どもも、大人が少し読んで、その後を続いて読む形で輪読に加わります。子どもたちは目を輝かせて、難しい聖書のことばに挑戦しています。いつから始まったのかはつきりしませんが、長い年月をかけ、何人もの子どもたちが入れ替わりながら、新約聖書を読み終わり、旧約聖書に入りました。

この輪読の時間は、いっしょに聖書を読む大人も、子どもたちの成長を実感する場となっています。子どもたちがいっしょうけんめい聖書に親しむ姿に、励まされ教えられるのです。

(前半のまとめ)

①信仰共生は自動的にはなされません。意識的な取り組みが必要です。同時に、異教社会で信者家庭に生まれるということは、特別な恵みであり大きなメリットです。

②礼拝において、子どもたちは共同体の一員としてともに神様の臨在に触れるという霊的な経験が不可欠です。

③家庭では、親の忠実な信仰生活や、日常生活の中で神様に従う信仰の姿勢から信仰共生がなされていきます。

④幼い頃から生活の中で、聖書に親しみ生きることが大切です。

子どもたちに聖書や救いについて知識を「教える」ことはとても大切なことです。しかし「受け継がせる」働きは、「教える」という方法に偏る危険があります。信仰共生では大人たちがどのように信仰を生活しているか、どのように子どもたちといっしょに信仰を生活するのに重きを置きます。

教会や家庭で、礼拝の場やふだんの生活の中で、私たち自身が積み重ねてきた信仰の歩みを子どもたちは見ています。もし子どもたちが信仰から離れていくとしたら、その一因は信仰を共に生きる私たちの生き方にあるかもしれません。子どもたちにどのような働きかけをするか考える前に、私たち自身の信仰について問い直し、場合によっては悔い改める必要があります。

信仰共生、信仰を共に生きるとは、決して簡単な働きではありません。祈りと愛と時間と労力と忍耐が必要な働きです。自分自身の信仰が常に問われるシビアな働きです。しかし、そこには豊かな結実があります。教会の将来と希望が詰

まっています。この働きのために、労をいとわない者でありたいと願います。

Ⅲ、幼い魂と共に

―信仰共生の課題と取り組みのヒント

ここまでは聖書を通して原則的なことを見ました。ここからは実践的なことについて考えます。信仰共生のために、教会と家庭は実際にどのようなことができるでしょうか。「前半のまとめ」として挙げた四つの点を念頭に置いて考えていきましょう。

1、信仰共生に対する意識を持つ

信仰の共生は自動的にはなされません。家庭と教会は、明確な信仰共生のビジョンと意識を持つことが必要です。子どもたちと共に、この信仰を生きると決めて、それを成し遂げる意思を持ち、そのためにたゆむことなく祈り、取り組みたいと思います。

宗教二世間問題が世間を賑わしています。信仰を強制してはいけないという空気があります。また自覚的に選んだ方が信

信仰が明確になるという考え方もあります。それゆえ、信仰の選択は子どもの自由に任せるという意見を聞きます。

しかし私はその考えには反対です。第一の理由はイエス・キリスト以外に救いの道がないからです。信仰の選択はいのちにかかわる選択です。自由に選択させるようなことからはありません。

第二の理由は、子どもたちがふだん置かれている環境は、信仰とも聖書とも無縁だからです。ミッションスクールでなければ、学校で聖書に触れる時間はありません。週一日教会に行つて得られる情報と、学校・地域社会・友だちなどの人間、インターネットなどのメディアを通して受け取る情報量には大きな差があります。このような状態で、子どもたちが正しく判断することは困難です。

信者家庭に生まれた子どもたちにとって大切なことは、自分の価値観に基づいた信仰の選択ではありません。信仰に基づいた人生の選択です。大切な選択をするときに、神様を信頼し、イエス様に委ねて選ぶということです。

「意識を持つ」ということは、必ずしも大きなエネルギーを使つて新しく何かを始めるということではありません。無意識のうちに行つてきたことを、より意識して目的をもつて行

おうとするだけで生き方は変わってきます。

みなさんは生まれたばかりの赤ちゃんに、どの宗教を選ぶかを聞くでしょうか。むしろ素朴に、この子がイエス様に守られてすくすく育つようにと願うのではないのでしょうか。こういっただけでもが自然に抱く気持ちを、信仰共生という明確なビジョンとして意識することから始めてはどうでしょうか。

親が信仰共生の意識を持つて子どもに接し続ける時、子どもはその気持ちを感じ取ります。親が大切にしているものを、子どもも大切なものとして共有します。「イエス様を信じて成長してほしい」と親が願い続けることは、子どもの人格形成の土台に大きな影響を与えます。

教会も同様に、信仰共生の意識を持つて子どもたちとその家庭を支える必要があります。子育て世代の一部の人だけの課題、教会学校の奉仕をしている人だけの課題ではなく、教会形成の課題として、教会全体で受け止めることが大切です。

(続く)

(※「牧羊者・二〇〇九年度Ⅱ巻」と「二〇〇九年度Ⅲ巻」とに掲載されたものに、後藤真師がこのたび新たに一部修正加筆されたものを、編集して再掲させていただきました。)

聖書

マタイ28・16〜20

タイトル

一緒にいてくださるイエス様

暗唱聖句

見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。

マタイ28・20

目標

共におられるキリストを覚え、宣教に遣わされる者となる。

導入

(飯田勝彦)

新しい学年になり、少し慣れましたか？ クラス替えのあったお友だちは、新しいお友だちが出来たでしょうか。もし、みんなの友だちが「これからずっとずっと、友だちでいようね」と言ってくれたら嬉しいでしょう。イエス様から同じ言葉を言われたらどうでしょう？ イエス様は心からみんなに「どんな時でも、あなたから離れずにいつも一緒にいるよ」と約束してくださいます。

イエス様の復活を信じる

イエス様は、どうして「いつまでも一緒にいる」と言うてくださるのでしょうか？ それは、みんなを心から愛していてくださるからです。みんなも大好きな友だちと

いつまでも一緒にいたい、と思うでしょう。イエス様も同じです。イエス様は、罪で苦しんでいる私たちを自由にするために十字架で死なれました。しかし、イースター礼拝で聞いたように、イエス様は死んで終わったのではなく、3日目に死の力に打ち勝ってよみがえられました。そして、弟子たちの前に自分がよみがえったことを現してくださいました。でも、弟子たちの中には、よみがえりを信じる人と疑う人がいました。みんなはイエス様のよみがえりを心から信じていますか？ 「ビミヨ（微妙）」って言う人がいますか。イエス様のよみがえりを信じるなら、私たちの心に力と大きな喜びがわき出てきます。

イエス様を伝える

よみがえられたイエス様が、弟子たちに「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプステマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」と言われました。これは、イエス様の「大宣教命令」と言われるものです。イエス様は、このすばらしい福音をすべての人に伝えなさいと弟子た

ちに命令されたのです。

みんなは、嬉しいことがあったら友だちやお父さんお母さん、兄弟姉妹に黙っていられなくて思わず言ってしまうでしょう。そのように、よみがえられたイエス様を多くの人たちに伝えましょう。

イエス様が弟子たちに言われたこの「大宣教命令」は、今の私たちにも言われていることです。そして、イエス様はみんながイエス様の事を一人でも多く人たちに伝えて行くことを期待して今も用いてくださっています。

イエス様は共にえられる

弟子たちには、イエス様を伝えに行くために何が助けになったでしょうか。それは、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」と言うイエス様の約束でした。イエス様は弟子たちだけに宣教に行かせて「わたしは知りません。あとは頼みます」と言われませんでした。

イエス様は、弟子たちと共に行ってくださるのです。それも、世の終わりまでいつも共にいてくださるのです。イエス様が十字架で死なれた時、弟子たちはイエス様を見捨てて逃げてしまいましたし、彼らは心の中で「もう

すべてが終わりだ」と思ったに違いありません。でも、イエス様は、裏切った弟子たちを見捨てないで彼らの前に現れてくださいました。そして「世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」と約束されました。

イエス様が弟子たちに言われたこの言葉を今朝、同じようにみんなにも言われます。たとえイエス様のことを思う時にも思わない時でも、どんな場所でもイエス様は、いつも共にいてくださいます。そして私たちを、イエス様を伝える宣教のために用いてくださいます。イエス様の側で、イエス様のお役に立てるなんて素晴らしいですね。

まとめ

イエス様が死よりよみがえり、世の終わりまでいつも共にいてくださると信じる時、みんなの心は守られ力が与えられます。そして、私たちは喜んでイエス様を伝えることが出来ます。今も共にえられるイエス様を信じて、家族や友だちの所にイエス様の素晴らしさをイエス様と一緒に伝えていきましょう。

♪主はよろこびです♪ (ホ76)

聖書 マタイ28・16〜20 テーマ 共におられるとの約束

序論

(大頭真二)

復活されたイエスは、天に昇られる前、弟子たちにお言葉を残していかれた。それは、イエスを信じる私たちにも与えられているお言葉である。

一、信仰への招き

復活のイエスを「疑う者たちもいた」。しかし、イエスは疑う者も含めて彼らに「近づいて来て」くださったことに目をとめたい。私たちは信仰の弱さを覚えるとき、主を遠く感じる。けれども、そのときこそ主は最も近づいていてくださるのだ。復活の主を疑った代表格はトマス。主はトマスに近づいて、「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」(ヨハネ20・27)とおっしゃってくださいったことを思い出そう。

二、宣教のご命令

「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。」主イエスは「ですから」と宣教を命令される。その権威は神の子としての権威であるだけでなく、十字架と復活を通られたことによって父から与えられた二重の権威である。この権威が及ばないところはどこにもない。私たちの宣教は主の権威の及ばないところで行われるのではない。それがたとえ地の果てであつても、また日本のような偶像の国であつても、主の権威の下にある場所であることを覚えたい。

大宣教命令の内容である「弟子とし」、「父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け」、「命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい」はいずれも、宣教の目的が一回かぎりの決心ではなく、生涯を通してよい神との交わりに進むキリスト者を誕生させることにあることを示す。特に「父、子、聖霊の名」というときの名は単数であり、神の三位一体性を示している(新改訳チェーン式引照付欄外註参照)。三位一体の神は、愛の交わりのうちに一つの神である。そのありさまは「ペリコーシス、すなわち相互内在・相互浸透と表現さ

れてきた(マクグラス「キリスト教神学入門」445頁)。バプテスマによってキリスト者は、ご自身が交わりの神である三位の神との交わりへと招かれる。そして、その交わりのうちにキリスト者は宣教に遣わされるのである。このことをヨハネ17章は余すところなく描く。「父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです」(21)とあるように。

三、臨在の約束

昇天後も、主イエスは(いつもあなたがたとともにいます)と約束された。遍在(へんざい)(どこにでも存在すること)は神の性質である。インマヌエルの神である主が私たちとともにいてくださるのだ。

けれども、ここでの臨在の約束は、信仰者ひとり一人に与えられている約束であると同時に、特に宣教する教会に向けられている約束であることに注意したい。キリストは「そのからだである教会のかしらです」(コロサイ

1・18)。主は教会と一体でいてくださる。教会の喜びや苦しみは、主の喜びや苦しみである。かつて「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」(使徒9・4)とおっしゃった主は今も教会と喜びや苦しみをともにしていてくださる。現実の教会がいかに問題だらけであるかは言うを待たない。教会の歴史がそれを語っている。何よりも私たちはなほだ不完全で恥じ入るようなお互いである。けれども、そんな教会と共に宣教することを、主は選びくださった。そして時に教会が誤り、私たちがつまずきとなるときにも、主は私たちと共にとどまってくださって、私たちを励まし、懲らし、悔い改めに導いてくださる。そして、何度でももう一度立ち上がらせてくださるのである。

結論

宣教は主の命令である。主はこの光栄あるわざをご自身の権威をもって可能とし、ご自身が共にいてくださることによって続行させてくださる。インマヌエルの主の招きに応じて、日々主を証しし続ける者であらう。

研究資料

(宮澤清志)

マタイの隠された主題のひとつはこの「共におられる主」(インマヌエル)ということである。マタイはこの主題によって福音書を書き出し(1・23)、この主題によって福音書を閉じる。同時にこの主題はマタイの中間にもみられる(18・20)。マタイのイエス像の一つは、この「共におられる主」であるということができるのである。

テキスト

16 十一人の弟子たち ユダの死を計算に入れた数字(27・5)。ガリラヤ 復活の主イエスがガリラヤで弟子たちにお会いになった記事は、この個所とヨハネ21章に述べられている。イエスが指示された山 具体的な「山」の記述は出てこない。しかし、マタイにおいては、山は神的顕現^{けんげん}の象徴として、また日常の世界から離れた啓示の場、ないしは救いの場として描かれている(4・8、5・1、15・29、17・1)。

17 疑う者たちもいた この言葉は注目に値する。実は、この「疑う者たち」が誰^{だれ}なのかで、この個所の語り方も変わってくる。例えば16節の「十一人の弟子たちは」

を主語として、この場面には復活の主と十一人の弟子がいたとすると、疑ったのは礼拝している十一人の弟子たちということになる。しかし、「疑う者たち」(新改訳2017)と取った場合、この場所には十一人の弟子たちの他にも人々がいたことも推測され、パウロが「五百人以上の兄弟たちに同時に現れた」(1コリント15・6)という場面をここに見ることもできる。同時に「疑った」人々とは、この「兄弟たち」ということも可能性を残す。いずれにしても、復活者の顕現によって、信仰に導かれる者となお疑う者とは分極化したという見方である。また、マタイが「疑った」という言葉を用いるに際して、「礼拝」と結びつけている(この個所と14・31)ことから考えると、礼拝しつつも疑ってしまう弱い人間性を指摘しているとも言える。

18 権威 イエスへの権威の与え主は父なる神である。イエスは荒野の試みにおいて、サタンからの試みを決然と拒否し、「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。」(4・8・10)と、ただ神にのみ仕える道を進んで行かれた。ここにおいて、イエスは十字架への道を決然と進んで行

かれたのである。しかし、この十字架と、それに続く復活を通じてこそ、天上・天下一切の権威がその手に託されたのである。

19〜20 イエスは、この「神の子」としての権威により、大宣教命令を出されるのである。その命令は「行って、あらゆる国の人々を弟子とする」ことである。この個所で、**あらゆる国の人々** とあるが、特筆すべきはマタイがイエスの復活において世界的伝道の視点を持ったと言うことである。復活前のイエスの時代には、福音はイスラエルに限定して語られていた（参考 10・5〜6、15・24）が、イスラエルが福音を拒否した結果、福音は異邦人に対しても語られる時代に突入した。イエスの復活によって新しい時代の幕が開いたと言える。

また、その弟子たちに命じられることは、「父と子と聖霊との名によって、人々にバプテスマを施すこと」であり、また「命じられたいっさいのことを守るように教えること」であった。前者について言えば、三位一体の神との結合という意味合いがそこにはある。**名において**とは、名の中へ、すなわち父、子、聖霊の神ご自身との生きた交わりに入ることを表わす。また、後者の **教え**

とは、教え続けるという継続を表す言葉であり、またその内容は、**命じておいた、すべてのこと** とあるように、山上の垂訓を初めとするこの福音書に記されているイエスの教えのすべてであると考えられる。**見よ。わたしは世の終りまで、いつもあなたがたとともにいます。** マタイによる福音書の特徴は、イエスを常に信仰者と共にいるお方（インマヌエル）として描いているということである（1・23、18・20）。マタイによる福音書のイエスは、徹頭徹尾「インマヌエル」で貫かれているといってもよい。洗礼を受けて、主イエスの教えの一切を守ることができるのは、主イエスが信仰者と共にいてくださるからである。

最後に、この個所に「すべての」「いつも」という句が繰り返されていることも見逃すことができない。福音はすべての人間に、聖書におけるすべての内容を、すべての時に、主の弟子たちによって、伝えられなければならないのである。

参考図書 デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換上』（東京ミッショナリ研究所）、他

聖書

ルカ3・15〜22

タイトル
暗唱聖句愛と喜びのうちを歩もう！
あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。ルカ3・22

目 標

神が遣わされた御子キリストを信じ、従う者となる。

導入

(飯田勝彦)

4月は新しいスタートの時期です。新しい学年がスタートしました。なかにはクラス替えがあつて新しい友だちと新学期をスタートした人もいますでしょう。

新しい学年になる前に何か準備をしましたか？ 一年生なら新しい制服やランドセルなどがありますね。他の学年なら新しい教科書、ペンケースや他の物を新しくした人もいますでしょう。新しいスタートにはいろんな準備が必要です。神様は、私たちが新しくされるためにいろいろな準備をしてくださったのです。

道を備えたバプテスマのヨハネ

聖書の中にヨハネという人が出てきます。今朝、登場するヨハネは「バプテスマのヨハネ」と言つて、ちよつ

と変わった^{かつう}恰好をしていました。少し想像してみてください。彼はラクダの毛の服を着て、腰に革のベルトをしています。そして彼の食事はいなごと野蜜でした。さらに彼は、人気のない寂しい荒野に住んでいました。

このヨハネは、神様から大切な使命が与えられていました。それは、救い主イエス様が来られるための準備をすることでした。ヨハネは「あなたがたが待ち望んでいる救い主は私よりも力があり、私よりも遙か^{はる}に偉大な方です。そして、私たちを内側からきよめる聖霊と火のバプテスマを与えることがお出来るようになる方です」とみんなに、救い主がまもなく来られることを告げました。それがイエス様が来られる備えでした。

皆さんの中には、もうイエス様を信じて救われている人もいますでしょう。そのために神様がどんなことを準備してくださっていたと思いますか？ その一つは、教会の皆さんがあなたのために祈つていてくださったということです。

洗礼を受けられたイエス・キリスト

ヨハネが悔い改めのバプテスマを授けているところ、イエス様もバプテスマを受けに来られました。この

ことはマタイに詳しく記されています。ヨハネはバプテスマを受けようとされるイエス様に「いやいやイエス様、私こそあなたからバプテスマを受けて頂かなければならない者なのに、私のところにおいでになったのですか？」と慌てふためいている様子が目に浮かびます。もし、教会学校の先生が皆さんの所に来て「○○君、お願いがあるんだけど。私の頭に手をおいて祈って」と言われたら「えっ、そんなこと出来ませんよ。僕の方が祈って欲しいですよ」と言うかもしれませんね。

イエス様は罪のない聖なる方です。ですから、悔い改めのバプテスマは受ける必要がありません。でも、あえてイエス様は、バプテスマを受けるといふ正しいことを自分から進んでしてくださったのです。イエス様は徹底的に神様の望まれることをされました。

ヨハネからバプテスマを受けられた時に、イエス様が祈っておられると天が開け聖霊が降りました。そして天から「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」と父なる神様の語り掛けがありました。イエス様は神様から受け入れられ、愛されていることを確認されました。これはイエス様の働きの大きな力となったので

す。

愛と喜びのうちに歩む私たち

イエス様は私たちの心、生活、人生を祝福でいっぱいにするために来て下さいました。そのためにイエス様は、祝福を妨げる罪を解決しようと十字架にかかって死なれ三日目によみがえってくださったのです。このイエス様を救い主として信じましょう。イエス様を信じるなら私たちはイエス様の内に招かれ、イエス様が父なる神様から言われた「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」という声をいつも聞きながら生活できます。

まとめ

父なる神様はイエス様にあつて私たちを見てくださり「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」と声を掛けて励まし続けてくださいます。この言葉は何と安心で力の湧く響きでしょうか。イエス様を信じ愛と喜びのうちに歩みましょう。

♪すくいの主イエスに♪（ホ95、イン37、イン新45）

聖書 ルカ3・15〜22 テーマ イエスの受洗

序論

(小泉 創)

洗礼式は、喜びの日です。罪と死の内にとらえられていた者が救い出されて、父・御子・御霊の名によるバプテスマを受けることを通し、神の子とされ、神のいのちによって生きる者とされます。

この箇所は、主イエスが公生涯のはじめに洗礼をお受けになられたことを教えています。

一、救い主は誰か

人々がずっと待ち望んでいたキリストは、預言者の権威に満ちた存在でした。多くの人は、バプテスマのヨハネが悔い改めを迫る姿に、不正を正し社会をつくり変える神のみわざを期待しました。ヨハネの姿は、自分たちが求める救い主にふさわしいと感じていました。

しかしヨハネは、自分は救い主ではない、と知っていました。①自分はその方の偉大さの前で仕える資格もないほど、いやしい者にすぎない、②その方は聖霊と火に

よるバプテスマを与え、③麦ともみ殻を吹き分けるように裁きを行われる、のだと。

ヨハネは救い主の道備えをするために来たのです。彼は領主ヘロデの罪を告発したことからとらわれの身となり、後に首をはねられてしまいました。罪人たちは彼に好き勝手なことをしたのです(マルコ9・13)。それはキリストがたどられる十字架の苦難の道、人々に蔑まれる道を指し示しているようでもあります。

ヨハネにはるかに勝るイエスは、人々の只中に立たれ、救い主として公生涯を始めようとしておられます。人々がどのように判断し、接したとしても、イエスこそが神によって送られた唯一の救い主です。

二、イエスが受けられたバプテスマ

ヨハネが民衆に授けていたのは、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマでした(ルカ3・3)。イエスは罪の悔い改めを必要としないきよい方ですから、本来はバプテスマを受ける必要はなかったはずですが、それなのに、イエスが民衆と同じように、バプテスマを受けてくださったのは、神であるお方が、私たち罪人と同じところにま

「で下りてきてくださったということであらわしています。」

イエスがこのようにバプテスマを大切になされたので、教会も二千年間バプテスマを重んじてきました。主イエスが受けられたのと同じように、私たちもバプテスマにあずからせていただくことで、キリストの死とよみがえりにあずかり、神の子キリストと一つにされるのです。

三、神の愛の子ども

バプテスマを受け祈っておられたイエスに、不思議なしるしを与えられました。天が開けて聖霊が鳩のような姿をとってイエスの上に降り、天からの声がしました。それはイエスに対する父なる神の宣言でした。

「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」これは王の即位を歌った詩篇2・7を思い起こさせます。神は、神の子であり、王であるイエスを救い主としてお送りくださったことを告げてくださいました。イエス以外の誰も、父なる神からこのように宣言された者はいません。

これほど尊い方が、私たちのすべてを引き受けてくださり、罪と死から救うために、いのちをかけてくださったのです。イエスを通して、私たちは神を知り、神の愛の大きさを知ることができます。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ3・16)。

結論

イエスは神であられたのに、私たちと同じ人の姿をとってくださった救い主です。どれほど力ある人物であつても仕える資格をもたないほどに貴いお方なのに、イエスは私たちを愛し、共に歩むことを喜んでくださいます。イエスが父なる神にどこまでも従い通され、一つであられたように、私たちもイエスを救い主と告白し、バプテスマの恵みにあずかって一つとされ、どこまでも従ってまいりましょう。

研究資料

(辻林和己)

ルカ3・1〜20は、バプテスマのヨハネ（洗礼者ヨハネ）の宣教の様子を告げる。7〜14節で、ヨハネは群衆、取税人、ローマの兵卒たちに、悔い改め、愛と正義、誠実と知足を説く。21〜22節は、主イエスの受洗のときに起こった出来事を語る。

テキスト

16 私はその方の履き物のひもを解く資格もありません
当時、主人の履き物のひもを解くことは奴隷の役目だった。「私よりも力のある方」である救い主（キリスト）に対して自分はしもべとして仕える値打ちもない。それほどこの地に「来られる」救い主は偉大なお方であることを証しする言葉。**聖霊と火** ヨハネが施していた洗礼は人々の悔い改めのための「水のバプテスマ」であった。しかし、救い主はもつと力のある「聖霊と火のバプテスマ」を授けられる。「聖霊のバプテスマ」が人々に与えられるようになるのはペンテコステの出来事（使徒2・1〜4）以降。「火」は聖霊が人をきよめるみわざを表して

いるという説がある。

17 ご自分の脱穀場を…、麦を集めて倉に納められます
農業の脱穀の麦のふるい分けは、神の裁きの表象として用いられている。「穀を消えない火で焼き尽くす」は神の決定的刑罰を表す。ルカ3・9の警告がここでより強く示されている。

18 福音を伝えた 原文では[ギ]ユーアンゲリゾマイ（「良い音ずれ（福音）を告げる」という意味の動詞）が用いられている。ヨハネの働きは、主イエスの福音宣教への備えとなった。

19 領主ヘロデ ヘロデ大王（1・5）の息子ヘロデ・アンティパス（3・1）。彼がガリラヤとベレアとの領主であったのは、BC4年〜AD34年。**兄弟の妻ヘロディアのこと** ヘロデは自分の妻（アラビア王アレタ四世の娘）と離婚し、異母兄弟ヘロデ・ピリポの妻を奪って自分の妻にした（マルコ6章、レビ18・16参照）。この不法な結婚に関してヨハネはヘロデを非難したが、ルカ福音書だけはそれだけでなくヘロデが「行った悪事のすべてを」非難した、と告げる。

20 ヨハネを牢に閉じ込めた バプテスマのヨハネの投

獄と死に至る経緯は、マルコ6・14～29で語られている。ルカ福音書では、これ以降、ヨハネは登場しない。「旧約時代の最後の預言者」と呼ばれるヨハネは、その短い活動期間を終える（ルカ16・16参照）。

21 イエスもバプテスマを受けられた 民衆と主イエスの受洗は、時系列では、19～20節のヨハネの投獄より前である。主がヨハネからバプテスマを受けられた理由は諸説ある。主イエスがヨハネに受洗を志願された「今は」（マタイ3・15）、主にとって新しい出発の時。人の目から隠れた生活から、メシア（救い主）としての公生涯への転換であつたから。また主イエスがヨハネから受洗することによって、ヨハネの働きが神から出たものであることが明らかにされるために。以上のような理由が考えられる。しかし、最も重要なことは、主イエスはやがて十字架上で人々の罪を負われるお方であるがゆえに、公生涯の初めにバプテスマを受け、罪人の立場に立つて下さったことである（イザヤ53・12、Ⅱコリント5・21参照）。折っておられると ルカは他の福音記者が何も記していない主イエスの祈りの生活を六回記しているが、これはその初回である。

22 聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた 旧約聖書には、預言者や王の任職のときに神の霊が降ったり、油を注がれたりする個所がある。ここで聖霊が降ったことは主イエスがメシアとして任職されたことのしるしであろう。鳩はイスラエルの象徴で、主が新しい神の民を代表することを示しているという解釈、鳩を柔和さの象徴とする解釈等があるが、どれも決定的ではない。すると、天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」天からの声は、主イエスが神の子であることを明らかにする宣言である。父なる神の御子イエスに対する愛が強調されている。「聖霊」と合わせて、ここに三位一体の神が啓示されている。宣言の表現は王であり神の子であるメシアを語る詩篇2・7を想起させる。主イエスは王であり、神の子であられたのに、ヨハネからバプテスマを受け、罪人の立場に立つて公生涯を歩み始められたのである。

参考図書 ラルフ・アール「ルカの福音書」『ウェスレアン聖書注解』（新教出版社）、熊谷徹「ルカの福音書」『新実用聖書注解』（いのちのことは社）他

聖書

ルカ4・1〜13

タイトル

荒野の誘惑

暗唱聖句

人はパンだけで生きるのではない。

ルカ4・4

目 標

み言葉に立つて悪魔の誘惑を退けられた
キリストにならう者となる。

導入

(和田牧子)

皆さんは悪魔^{あくま}についていると思いますか？ わたしたちを

悪の道にひっぱっていくおそろしい存在です。イメージ的にはバイキンまん？ いえいえ、もつとずるがしくてこわい、誘惑^{ゆうわく}の力をもっていますよ。なんと神さまの御子^{みこ}イエスさまでさえ、悪魔に誘惑されたのです。イエスさまは悪魔の誘惑に勝ったでしょうか。負けたでしょうか？

石に命令せよ！

イエスさまは神さまの霊でいっぱいにみたされ、ユダヤの荒野に向かわれました。そして四十日間も悪魔の誘惑にあわれたのです。そのあいだイエスさまは何も食べておられなかったので、お腹がペコペコになってしまい

ました。わたしたちだったら一日でも食べなければフラフラになってしまいますよね。それを見ていた悪魔はイエスさまに言いました。「もしあなたが神の子であるなら、ここにいるがつている石に、パンになればと命令しなさい。」悪魔はイエスさまなら石をパンに変えることもできると知っていて、あえてそんなことを言いました。それにたいしてイエスさまは何と答えられたでしょう？ 『人はパンだけで生きるのではない』と聖書に書いてある！」イエスさまは悪魔の誘惑の言葉にまどわされることなく、食べるパンよりも神さまのみ言葉が大切と話されたのです。

わたしを礼拝せよ！

そこであきらめないのが悪魔です。悪魔はイエスさまを高いところに連れていき、あつというまにすべての国々を見せて言いました。「これらの国々を治める力と栄光をあなたにあげましょう。それらは私にまかされていて、すきにしてよいのです。もしあなたがわたしの前にひざまずいて礼拝するなら、これらのすべてがあなたのものになります。」

これはなかなかの誘惑ですよ。東京の高い高いタワー

マンションのてつぺんに連れていかれて、そこから見えるすべての物や人々をあなたにあげる、あなたのすきにしてよいのだと言われたらどうでしょう？ コツコツと働かなくても、悪魔を礼拝するだけでそれらが手に入るとしたら？ そんなバカなと思うかもしれませんが、今でもこれに似たような詐欺やあやしい宗教が世界にはびこっているのではないのでしょうか？

しかしイエスさまは決してだまされませんでした。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と聖書に書いてある！』と言われました。わたしたちを造つてくださった神さまただお一人が礼拝すべき方であることをはっきりと宣言なさいました。

下にとびおりなさい！

つぎに悪魔はイエスさまをエルサレムにつれていき、お宮のやねのはしっこに立たせました。とても高く、ここから落ちたら命はありません。悪魔は言いました。「あなたが神の子なら、ここからとびおりなさい。『神は、あなたのために御使いたちに命じて、あなたを守られる』と書いてあるでしょう？」

イエスさまはどうされたでしょうか。何でもおできに

なる奇せきの力を見せるために高いお宮からとびおりたでしょうか。わたしたち人間のプライドの高さ、みえっぱりなところをついてくるような誘惑ですね。でもイエスさまはきっぱりと言われましたよ。『あなたの神である主を試みてはならない』と言われている！』さすがに悪魔もこうなんです。悪魔はイエスさまからはなれていきました。

結び

悪魔はいかにも悪魔！というみなり、かたちで誘惑してくるではありません。現代でもさまざまな方法で品をかせ、かたちをかせて誘惑してきます。ときにはいい人のふりをして、ときには聖書のみ言葉さえも使つてわたしたちを誘惑してきます。そのような誘惑にうち勝つにはどうしたらよいのでしょうか？ ぶれないでしっかりイエスさまを見上げ続けることです。「天のお父さま、わたしたちは弱いものですが、イエスさまのようにみ言葉に立つて勝利の生活ができますように、力をあたえてください」とお祈りしながらすすんでいきましょう。

♪フリー♪ (イン40、イン新48、PW56)

聖書 ルカ4・1～13 テーマ 荒野の誘惑

序論

(小泉 創)

主イエスは公生涯を始めるにあたり、私たちと同じように洗礼をお受けになり、荒野にて悪魔からの誘惑を受けられました。「聖霊に満ち」た主イエスが、「御霊によって荒野に導かれ」、誘惑にあわれたのです。ましてや私たちの信仰生涯が誘惑と無縁のはありません。主がどのように誘惑に打ち勝たれたかを学びましょう。

一、第一の誘惑

四十日にわたる断食によって空腹になられた主に、悪魔の最初の誘惑がおそいかかります。悪魔は「あなたは神の子なら」と、近づいてきます。3章の洗礼の場面で神が宣言なさった「あなたはわたしの愛する子」という言葉を逆手にとつての誘惑です。悪魔はキリストがどのようなことでもなし得ることを知っていましたので、この石に、パンになるように命じなさい」と言つたのです。石をパンに変える奇蹟は、多くのの人にとつて「よきしら

せ」にみえるでしょう。グローバルな格差社会に住む私たちは、飢餓の問題、暴力の問題、金銭的搾取、性的搾取の問題など、多くの問題に取り囲まれています。目の前の課題に具体的な解決をもたらすことができれば、神の素晴らしさをあらわせるのにと歯がゆく思ったり、それができない自分たちがあまりにも無力であるように思うことがあるかもしれません。取り組むべき問題に目をつぶってはいけません。それで信仰が揺らいだり、批判的な思いに支配されてしまうなら、目の前にパンがないことが問題なのだ、という悪魔の声を聴いてしまっているのかもしれません。

イエスは悪魔の言葉を拒み、旧約聖書・申命記8・3の言葉を引用しました。「人はパンだけで生きるのではない」。人々の必要を軽んじてはなりません。本当の意味で人を生かす神の言葉を聞き、力ある神への信頼を見失ってはなりません。

二、第二の誘惑

次に悪魔はイエスに、自分にひざまずくならば世界の国々の権力と栄光を与えると告げました。神の子に向

かつて、自分を拝めというなど、正気の沙汰ではありません。私たちも悪魔崇拜はせずとも、知らず知らずのうちに繁栄を求める「利益信仰」に陥ってしまふならば、その行きつく先は偶像礼拝です。この誘惑に陥って、多くの人々が信仰の道を踏み外してきました。それは一時何かを得られたように見えても、いずれは全ての物を失う虚しい道です。イエスは申命記6・13を引用して、この誘惑を退けられました。「あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい」。あなたは権力や栄光、称賛に心を奪われず、神だけをあなたとしての神としていますか。

三、第三の誘惑

最後に、悪魔はイエスをエルサレムの宮の頂上に連れて行きました。そして、「神の子なら」ここから下に身を投げなさい、神は必ずあなたを守ってくださるから、と詩篇91篇のみ言葉を引用して誘惑したのです。悪魔はみ言葉に通じています。本来この詩篇は、主を避け所とする者が、日々歩く道で守られるという信頼を歌ったものであって、あえて危険な中に飛び込んで、神に対して無謀な試みをすることを勧めてなどいません。神の名を用

いて、聖書をねじ曲げて不健全なところへと導くのは悪魔の常套手段じょうとうしゅんです。創世記のエデンの園のときからずっと、悪魔は巧妙に嘘を織り込みながら、人を神とその御言葉から引き離そうとしてきました。

主イエスはここでも申命記6・16を引用します。「あなたに試みる必要などない、と誘惑を退けられました」。

悪魔の誘惑は十字架の場面でも主に襲い掛かりました。人々を通して、おまえがキリストであり、王であるなら、十字架からおりてみよ、自分とおれたちを救え、とあざ笑ったのです。それは神に信頼し、従うことをやめさせようとする誘惑の声でした。しかし、主イエスは十字架からおりることをなさらず、私たちのために苦難の道を歩み切って勝利してくださいました。

結論

イエスは神のみ言葉によって、悪魔の誘惑に勝たれました。私たちも神の真実なみ言葉を健全に理解し、心にとくわえましょう。そして様々な形で襲ってくる、嘘に満ちた悪魔の誘惑に打ち勝つのです。

研究資料

(辻林和己)

ヨルダン川でバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた後、主イエスは宣教を始められる(3・23)。具体的な宣教開始は4・14からである。その前に、主イエスは荒野で悪魔の誘惑にあわれる。

テキスト

1 イエスは聖霊に満ちて 「荒野の試み」の並行箇所はマタイ4・1～11、マルコ1・12～13であるが、ルカだけが主イエスは「聖霊に満ちて」おられたと告げる。**御霊によって荒野に導かれ** この荒野の試みが神の計画と御霊の守りの中で起こされたことを示す。そして、神の御子イエスが神への全き従順と信頼の道を歩まれたことをも示している。

2 四十日間 「四十日」は旧約の出エジプト後の荒野の旅を想起させる。マナに満腹していたイスラエルの民は荒野で反逆し、苦悩の四十日つまり四十年を罰として科せられた(民数記14・34)。しかし、主イエスは何も食

べずに荒野で神に従い通される。

3 あなたが神の子なら 悪魔は主イエスが神の子であることを否定しなかった。神の子としての力を用い、石をパンに変えるようにと誘った。奇蹟によって自らの飢えを解決し、飢えている人々を助けるならメシアとしての使命を容易に果たせるのではないかと勧める。

4 人はパンだけで生きるのではない 主イエスは、申命記8・3の言葉をもつて悪魔の試みを退けられた。申命記8・3はこの後、「人は【主】の御口から出るすべてのことばで生きる…」と語る。パン(食物)も大切であるが、パンを与えて下さる神を知り、神の言葉を魂の糧とし、それによって養われることは何よりも重要である。

6 それは私に任されていて ここでの悪魔の主張を主イエスは否定しておられない。ヨハネ福音書の中で三回、主イエスは悪魔(サタン)について「この世の君」と言っておられる(ヨハネ12・31、14・30、16・11)。

7 もしあなたが私の前にひれ伏すなら、… 悪魔は私に服するなら、すべての富と権力を手に入れ、世界を支配することが出来ると誘う。**あなたの神である主を礼拝しなさい。主のみ仕えなさい** このときも、主イエス

は申命記の言葉（6・13）を引用された。礼拝と奉仕は神にのみさげられるべきものである。

10～11 神は、あなたのために…、あなたを守られる。彼らは、…、あなたの足が石に打ち当たらないようにする。神への深い信頼を詠う詩篇91・11～12を悪魔は引用し、主イエスを罪に誘う。神殿の屋根から飛び降りてみる、そうすれば神は御使いを送ってあなたを支えるであろう、そしてその奇蹟を見て、人々はあなたをメシア（救い主）と崇めるであろう、と。

12 あなたの神である主を試みてはならない 今回も主イエスは申命記を引用して答えられた。そして悪魔による聖句の引用が誤りであることを明らかにされた。この申命記6・16は飲み水がなかったイスラエルの民がモーセに不満を言ったこと（出エジプト17・1～7）に対して語られたことである。この個所は奇蹟を求める目的で、神を試みることはよくないと語っている。主イエスは、ご自分のためには奇蹟を起こす力を用いられなかった。いつも人を助け、苦しみから救い出すためにそれを用いられた。そして主イエスはみことばによって悪魔の誘惑を退け、神の主権に委ねることを示された。

13 悪魔はあらゆる試みを終わると 荒野の誘惑は今回の個所に記されている三回だけでなく、長く続いたことが示されている。悪魔はあらゆる種類の試みを主イエスに対して成したが主はそれらに打ち勝たれた。エデンの園ですべてを与えられていたにも関わらず、アダムは悪魔の誘惑に負けて墮落してしまった。しかし、主イエスは何もない荒野で、ただ神に従い、みことばと御霊により頼んで勝利された。しばらくの間イエスから離れた荒野での悪魔の誘惑は、主イエスに富や権力や奇蹟という「目に見えるしるし」を与え、十字架への道を回避させようとする試みであった。この後も、悪魔は主イエスを十字架へ行かせないように、十字架から降りるようにと執拗（しつこ）に働きかけてくる（マタイ16・22、27・39～43、マルコ15・29～32等）。

しかし、この荒野の誘惑、悪魔の試みに打ち勝たれたお方として、主はこれから公の働きを開始される。

参考図書 柿原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解』（いのちのことば社）、熊谷徹「ルカの福音書」『新実用聖書注解』（いのちのことば社）他

聖書

ルカ5・1～11

タイトル

弟子への招き

暗唱聖句

彼らは舟を陸に着けると、すべてを捨ててイエスに従った。
ルカ5・11

目標

自分の無力と罪深さを覚え、キリストに従う者となる。

導入

(今田雅子)

皆さんは、周りの人やスポーツ選手やその他の人達の中に「あの人の生活、歩みってカッコイイ、カッコイイ生き方だな」って、思うことはありませんか？ 苦しい時、悲しい時でも、目標に向かって真っ直ぐ歩いて生きる生き方って、「なんだかいいな」って思いませんか？ 自分の歩み、生き方や人生を、一つのもの一つの道をどんなことにも動かされずにしっかき生きる者とされたいですね。

イエス様に従ったペテロたち

ある時、すぐく沢山の人達が神様のことを聞きたいと思って、イエス様のところにぎゅうぎゅう押し合ひながら迫って来ました。イエス様はゲネサレの湖の岸辺に立ち、ペテロの舟に乗り、そこから沢山の人達に話さ

れました。その後ペテロに「湖の深い所に舟を漕ぎだして、網を下ろして魚を捕りなさい。」と言われたのです。すると、漁師ペテロは「イエス様、俺たち、夜中から朝まで寝ないで働いたけど、一匹も魚は捕れなかったんだ。だけどイエス様が言うから、やってみるよ」と、半分信じて半分疑って、そのとおりにしてみました。すると、なっ、なんと凄く沢山の魚が捕れて、網が破れそうになりました。そこで、急いで仲間を呼んで、その魚を二つの舟いっぱい引き上げると、両方の舟が沈みそうなくらい沢山の魚が捕れたのです。

そこにいた皆は、この出来事に凄く驚きました。するとイエス様は「今から、あなたは人間を捕るようになるのです。」と言われ、彼らはイエス様に従って行きました。しかも、なんと持っているものの全部を捨ててイエス様に従って行ったのです。

イエス様に従う祝福

ペテロ達は全部を捨ててイエス様に従ったのですが、捨てたのはどんなものだと思いますか？ 仕事、家族、友達、仲間、住んでる所など色々あると思います。ペテロ達は、イエス様に従って行くことは、持つてるもの全

部捨てても凄く良いことで大切だということが分かったのです。

ペテロ達はイエス様の弟子とされ、寝る時も、食べる時もいつもイエス様と一緒にいて、たくさんの人達に神様や救いのことを伝えて周りました。ペテロ達はイエス様の側にいて嬉しかったと思います。けれども、彼らは失敗しない完全な弟子ではなかったのです。イエス様が十字架に架けられる直ぐ前の時、ペテロはイエス様を三回も知らないと言い、他の弟子達は、十字架に架けられたイエス様のところから逃げて行っただけです。しかし、イエス様はそんな自分を裏切った彼らのところに、復活されて現れてくださり、さらには、聖霊が彼らの上に降り、復活のイエス・キリストを沢山の人達に喜んで証しする人に変えられたのです。彼らはイエス様に従って行って、神様から色んなものをいただき、なにも足りないと感じることなく、幸せいっぱいの人生活歩んだのです。

私たちもイエス様に従う者になろう

皆さん！ イエス様は「あなたにもペテロ達みたいに、わたしに従って来なさい」と言われます。「僕は何にも出来ないから、私は役に立たないからダメ」って思わな

いでください。イエス様に従って行っただけペテロ達は、強くて何でも出来た人では無かったのです。ペテロは、イエス様が「舟をだして魚を捕りなさい」と言われた言葉を疑いました。でも、イエス様の言うとおりにしたら魚がいっぱい捕れました。イエス様は神の御子で、何でもできる力を持っておられるお方。その神の力を見たペテロは、イエス様の足もとにひれ伏し「私は罪深い人間です」と告白し、自分が何も出来ない無力な罪人だと認めました。だからこそ、イエス様は、イエス様を主と認め、自分の罪深さを知った彼を弟子として選ばれたのです。

「イエス様に従って良くなかった。損した。」ってことはありません。イエス様に従って行っただけ人は、最高の人生活歩んでいます。また、「イエス様に従って行きなす」と歩み出す人に、イエス様がいつも助けてくれるのです。

皆さんも、イエス様に従って行きませんか？ みんなのことが大好きなイエス様は、どんなことになっても絶対に良いようにしてくださいます。さあ、神様を信じて頼って、従って行きましょう。

♪イエス様についていこう♪（イン82、イン新100）

聖書 ルカ5・1～11 テーマ 弟子への招き

序論

(石田高保)

この箇所は、イエス様が最初の弟子を招いた出来事を記しています。主はまずペテロとアンデレの兄弟、ヤコブとヨハネの兄弟という4人の漁師を弟子にしました。

一、人の中に神の計画を見る

漁師は魚を捕ることに全身の神経をとがらせます。寝ても覚めても、明けても暮れても魚を捕ることを考えています。おそらくガリラヤ湖のことは、どこに魚の群れがいるか、季節による風や波の具合はどうか、どんな道具が適切かなど知り尽くしていたことでしょう。その彼らに向かってイエス様が「あなたは人間を捕るようになるのです」と言われたとき、別の意味の漁師になれることに心を揺さぶられたでしょう。だからこそ彼らは生きる糧である網や舟をあつさりと捨てることができたのではないのでしょうか。ミケランジェロは教会の建設現場に転がっていた大理石を見たとき、そこから青年ダビデの像を彫り出そうというインスピレーションを受けたそう

です。熟練の漁師たちとは言え知識階級ではなかった彼らを主はいつもそばに置きました。イエス様の在世中は彼らはヒーローではありませんでしたが、ペンテコステから本領を発揮します。使徒たちは教会の基礎を造り、彼らの書いたものは聖書となつて二千年間、全世界で読まれていることは驚嘆すべきではないでしょうか。

弟子になつてからペテロは3年半、イエス様に仕え、また30年あまりにわたつて諸教会を導くことになりました。その間、激しい迫害に何度も会いながらもぶれることがありませんでした。最期は殉教したと言われますが、死に至るまで忠実であつたのも、きょうのみ言葉の力でしょう。ヨハネに至つてはパトモス島に流刑となり、殉教はしないものの長寿を与えられたそうです。

「イエスはシモンに言われた。『恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです』、イエス様は二千年の時を超えて私たち一人ひとりに語っておられます。人の心をグツと掴めるクリスチャンにしてあげようと。これは必ずしも説得力のある話ができるというわけではありません。またカリスマ的に人を引き付ける力を与えようというのでもありません。たとえば、

あなたと一緒にいると心が安らぐという人にしてあげようというのです。あなたに話を聞いてもらったら気持ち が楽になったと言われる人、何か希望が湧いてくると言 われる人、もう一度やり直してみようと力が出てくると 言われる人にしてあげようというのです。

二、神の計画にかかわる

このようにして主に召された弟子たちは、主の働きに 参加するようになります。「イエスはガリラヤ全域を 巡って会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあ らゆる病、あらゆるわずらいを癒やされた」(マタイ4: 23)。これはイエス様のお働きを要約したもので、ここ に三つのテーマが見て取れます。これは奇しくも大宣教 命令と同じです。「あらゆるわずらいを癒された」、これ は人の必要に応える愛のわざをすること。「御国の福音 を宣べ伝え」、これは福音を語ることによって人を救い に導くこと。「会堂で教え」、これは聖書に基づいて信仰 者がどのように生きるべきかを教えること。ノンクリス チャンはクリスチャンの愛に触れることによって神を知 り、イエス様を受け入れて救われます。その人が聖徒と して整えられて、今度は自分にされたことを他の人にし

てゆくこと、このような普通のクリスチャンが取り組む 再生産のプロセスこそが主のご計画でした。

初めはイエス様がこの三つのこと、愛のわざ・伝道・ 育成を全部ご自分でしておられましたが、途中から弟子 たちを二人一組にして各地に遣わし、同じことをさせて おられます。そのとき弟子たちにご自分の権威を授け て、ご自分と同じことができるように力づけておられま す。主は十二人に集中して弟子づくりをし、彼らが他の 人を弟子として育てられるように、3年半でこれをやり 遂げなさいました。もしいつまでもイエス様がそれを一 人でしていたら、何十年たってもユダヤを福音で満たす ことはできなかったかもしれません。

結論

私たちの身近に接する人々に対して、唐突に伝道する ことは適切ではないかもしれません。しかし聖霊に満た された愛のわざなら、歓迎しない人は少ないでしょう。 人は宗教は歓迎しなくても、愛の行いは歓迎するもので す。誰もが人間を捕るたましいの漁師として用いられます。そのようにして築き上げた信頼関係の中で、自然体 で証しをしてゆきましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

1 群衆が神のこばを聞こうとして…押し迫って来た「神のこば」は「神の国の福音」(4・43)。それを聞くために来るのは良い態度だが、それだけでは不十分(8・4～15参照)で、この後のシモンのような主体的応答が不可欠。ゲネサレ湖 ガリラヤ湖(マルコ1・16)。

2 小舟が二艘^{ふたふね} 大きな網で効率よく漁をするために、普通2艘以上の舟でチームを組んで働いた。舟から降りて網を洗っていた 漁を終えた後は、たとえ不漁でも、次回に備えて網を洗い、繕っておく必要があった。

3 シモン 彼は先に、その姑の高熱をイエスに癒^{いや}してもらっている(4・38～39)。舟に乗り…教え始められた押し寄せてきた群衆が多く、適度に距離をとる必要があったのである。さらにその状況は、音響的に円形劇場のような効果をもたらし、イエスの声をずっと聞きとりやすくと考えられる。日頃はシモンたちが魚をとる舟の上で、イエスはこのとき「人間を捕る」(10)働きをされたのである。

4 深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい 前節では「陸から少し漕ぎ出すように」とあったのに対し、ここは「深みに漕ぎ出し」とあるのを、ユダヤ人宣教と異邦人宣教の対比としてとらえる解釈もある。

5 先生 一般的な教師(ギ)ディダスカロス)ではなく、ここでは[ギ]エピスタテース(主人、上に立つ者の意)が用いられている。ルカは前者を客観的な「先生」の意味で用いるのに対し、後者は、相手の権威に対する主観的・個人的な感服が内包されている表現である。夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした 魚の捕れやすい夜間でも不漁であったのだから、日の昇った今ではなおさら捕れるはずがないという気持ち言外に表れている。おこばですの^で イエスの言葉に内在する権威を指し示す表現。イエスの言葉を間近で聞いたシモンは、半信半疑の中にも、姑にも癒^{いや}しをもたらしたその言葉に得も言われぬ権威を感じ取っていたのだろう。網を下ろしてみましよう 当時のユダヤ社会では、教師がその専門分野について命じるときには従うべきという風潮があった。裏を返せば、そうでないことについては従う必要は無かったのである。シモン・ペテロから見ても、イエスは

漁の素人であった。それゆえ、この応答は、自発的な側面も含まれる、ある種の服従と見る事ができよう。

6〜7 おびただしい数の魚が入り、網が破れそうに…別の舟：両方とも沈みそうになった 奇跡の素晴らしさが複合的な表現を用いて証言されている。このようなイエスによる増殖の奇跡は、旧約に前例を見出し得る（出エジプト8・6、Ⅱ列王4・1〜7等）。

8 主よ [ギ]キュリオスは一般的な「主人」をも意味し得る語であるが、ここでは1・43や2・11のような「いと高き主」を意味するであろう。私から離れてください。私は罪深い人間ですから 半信半疑で従ったことに対する後ろめたさもあったであろうが、それだけではない。すなわち、イエスの神的な権威に圧倒されたシモンは、自分の罪深さを認めるしかなかったのである。神の臨在に触れたとき、あのイザヤでさえ絶望の叫びを上げざるを得なかった（イザヤ6・5）。イザヤの場合と同様、ここもまたシモンにとっての召命の場面となった。

10 シモンの仲間の、ゼベダイの子ヤコブやヨハネ この3人は8・51、9・28でも揃って登場する。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです その言葉によっ

て万物を支配されるイエスが宣言するならば、それを成し遂げるためのすべての力も添えて与えられ、実現する。ここでは[ギ]ゾーグローン（直訳「生きたまま捕らえる者」）という語が用いられている。エレミヤ16・16を想起させる表現だが、そこで描かれる情景が差し迫ったさばきであるのに対し、ここでは主題がそのさばきからの救いへと移り変わっている。神の心は、さばきではなく救いにあるのであり、それゆえ、恐れることはない とシモンに語られたのである。イエスが命じるならば、恐れさえも消え去る。モーセやダビデがその使命を果たす上で、かつて羊飼いであった経験が役立ったのと同様に、ペテロが新しい使命を遂行していく上で、主は漁師としての彼の経験をも用いてくださるであろう。

11 すべてを捨ててイエスに従った 当時の漁師の収入は一般の平均以上だったと言われている。それを含めたいっさいを捨てるという態度には、新しい出発に向けての根本的な服従の意志が表されていると言える。

参考図書 注解書 *Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word)*, 榊原康夫（新聖書注解 新約1）。その他 *The IVP Bible Background Commentary: NT*

聖書

ルカ5・27～32

タイトル

罪人を招くキリスト

暗唱聖句

わたしが来たのは、正しい人を招くため

ではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。

ルカ5・32

目標

罪人を招かれるキリストを信じ、従う者となる。

導入

(今田雅子)

皆さんには、友だちがいると思うけど、なんで友だちになつたのかな？ その子から声をかけられた？ それとも自分からその子のところに行つて声をかけた？ イエス様は、どんな人に近づいて声をかけられたのでしょうか。

皆の嫌われ者レビ

ある日、イエス様は収税所に座っているレビという人に出会いました。レビさんの仕事は収税人。みんなから税金を集める人でした。皆さんが百貨店で物を買うとレビで110円とか108円を払います。その8円、10円が税金で、これは決められてるんですね。けれども、その当時の収税人たちは、自分が得するように決まっているよりもた

くさんの税金をユダヤ人から取り立てて、その一部をこつそり自分が取つていたのです。また、ユダヤ人から集められた税金は全部ローマ人のものになっていました。なぜなら、その頃レビさんが住んでいた国ユダヤは、ローマ帝国に支配されてたからなんです。だから「収税人」というだけでユダヤ人から罪人だと考えられ、嫌われていたのです。レビさんも、町の人たちから嫌われていました。しかも、レビさんが町を歩いてるだけで、「ほらほら、あのいや～なやつが来る！」と、みんなレビさんから離れて、声をかける人はだれもいませんでした。

イエス様に見いだされたレビ

そんなレビさんが心の中で思つてたことは、(みんな俺を嫌つてても、お金さえあれば大丈夫！ いつも楽しくて、喜びいっぱい生活ができるのさ！)と考えていたのです。大きくてきれいな家に住んで、好きな服もたくさん買って、おいしいご馳走もたくさん食べたり飲んだりして、足りない物は何にもありませんでした。レビさんは、楽しかったでしょうか？ いつも喜んで生活してたでしょうか？ いいえ、どこか寂しそうな顔をしてたんです。「お金がたくさんあつて嬉しいはずなんだけ

どな…」「みんなから税金、決まってるより多く集めてちよつと貰ってるけど、だめ？ でも、取税人はみんなやってるし、いいんだ。」自分の心の中のものやもやがどうしてなのか、わからないレビさんでした。そんなある日のこと。いつものように収税所にポツンと座っていると、一人の人が近づいて来て、「わたしについて来なさい」と言われたのです。その人はイエス様でした。レビさんはびっくり！「罪人扱いされてる俺なんかに、誰も声なんかかけないのに…おまけに「ついて来なさい」ってことは…俺を弟子にしてくれるのか。」レビさんは飛び上がるようにして、今までのものを全部捨ててイエス様に従って行きました。それは、自分と持っているもの全部をイエス様にお任せし、イエス様と神の国の為に使おうと決めたということです。

変えられたレビ

それからレビさんは、自分の家にイエス様を迎ええました。そして、イエス様のためにすごいご馳走を用意し、心からのもてなしをしたのです。また、レビさんの仲間の取税人やイエス様の弟子たちも一緒に食事の席に座って、楽しい食事が始まりました。ところが、その楽し

い食事会の様子を聞いた、パリサイ人や律法学者たちが、イエス様の弟子たちにあつぱつと文句を言いました。「なぜあなたがたは、取税人たちや罪人たちと一緒に食事をするのか。」するとイエス様は、「医者がいるのは元気で健康な人でなく病氣の人。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」と答えられたのです。

もう、レビさんの顔は寂しそうではなくなり、ニコニコと喜びいっぱい顔に変えられました。それは、イエス様によって、罪がゆるされ、心の中の真つ黒な暗いところが取り除かれたからです。

皆さんの心の中にも悪い考え、良くない思いがありませんか？ その罪をイエス様の十字架を信じ、赦してもらって、心の中の真つ黒で暗いところを取り除いてもらいたいと思いませんか？ イエス様はそうしたいと願っておられます。そして、「わたしについて来なさい」と呼び、誘っておられるイエス様について行きませんか？ そうすれば、あなたの心はイエス様の愛でいっぱいになって、周りにいる人たちにも、喜びが伝わっていくでしょう。♪すべてはイエスさまのもの♪（ふ68）

聖書 ルカ5・27～32 テーマ 罪人を招くキリスト

序論

(石田高保)

イエス様の言葉はときに私たちの価値観や人生観を逆なですることがあります。それは主が過激なのではなく、人間のほうが神の基準から外れているからです。

一、人は罪びとを憎む

ここで注目したいことは、イエス様が取税人を弟子に加えたことです。取税人といえはこの当時、忌み嫌われていた職業のひとつで、それはユダヤ人でありながらローマ人の手先となつて同胞から不当な税金を取り立てていたからです。主が取税人や罪人たちと平気で付き合つたことは宗教家たちの間でスキャンダルとなり、非難される原因となつたのも無理はありません。ほかの弟子たちも、とんでもない奴が入ってきたと迷惑したかもしれません。そのようなリスクにはお構いなく主は取税人を弟子としました。イエス様には彼がこの先、神様に大いに用いられるという青写真が見えていたのです。

マタイはイエス様の招きに即座に従い、楽して儲けられる仕事を辞めて主に従いました。そして自分の家にイエス様と弟子たちを食事に招きましたが、ほかにも取税人仲間や、罪人呼ばわりされていた人々も招きました。イエス様の弟子となる決意を表し、自分の救いについて証しをしたことでしょう。ところがこの喜ばしくも麗しい宴に水を差した人たちがいました。パリサイ人や律法学者たちが、^{うたげ}「なぜあなたがたは、取税人たちや罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのですか」と。何しろ取税人は平然と庶民から収奪し、私腹を肥やしていたからです。いやしくも先生と言われる人物が、取税人たちと分け隔てなく付き合う神経がパリサイ人にはまったく理解できません。彼らには神の子の心がわからなかったのです。「人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはしません」(マタイ9・17)、イエス様の新しい価値観は、パリサイ人の古い価値観には受け入れがたいものでした。人間の古い価値観を捨てなければ、神の国の価値観を人生に活かすことはできないのです。

二、神は罪人を愛される

このようにパリサイ人たちは取税人を裁かれる対象と

しか見ることができなかつたわけですが、イエス様はどうでしょうか。主は取税人を「病人」にたとえており、ご自分は彼らをいやす医者にとえています。病識を持たなければ手遅れにもなります。けれども自分は病人であるという病識^{びょうしき}を持てば、医者にかかつて適切な治療を受けることができます。取税人は自分が魂の病人である、罪人であるという自覚を持って医者なるイエス様の所へ行ったので、神の子にしていたくことができ、神のために用いられる人となりました。いっぽうパリサイ人は自分が魂の病人、罪人であることを認めようとはしませんでした。それどころかイエス様を亡き者にしようとして画策し、それは成功します。

並行箇所には「わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない」(マタイ9・13)とあり、大事なのは、拘子^{しご}定規な律法の適用ではなく、律法の本質である神の愛に根差した人へのあわれみであるということです。聖書的な生き方を四文字熟語にすれば、それは「敬天愛人」となるでしょう。私たちはみ言葉を大切にしています。それが詰まるところ身近な人を愛することにあります。自分の言おうとすること、しようとするところが、そ

の人を愛することになるかを吟味したいと思います。

〈わたしに来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです〉、この場合の正しい人とは、自分を義人だ、正しい人間だと行いに照らして思い込んでいる人です。こういう人はイエス様でも救いに導くことができません。主は、自分を罪深い人間であると認めた人をこそ救うことができるのです。

マタイという名前は主のつけ、親のつけた名前はレビでした。マタイとは「主の賜物」という意味です。これ以降、自分の存在も人生も神様持ちであるという自覚を持ち続けたことでしょう。その能力を宣教のために用いられ、千古不滅の福音書を書き上げました。

結論

クリスチャンは十字架によってまったく赦^{ゆる}されてはいませんが、いつでも罪を犯しかねないという意味での罪人です。私たちの持つて生まれた人間性では、罪と罪人とを分けることができません。しかし神様は何があっても愛することを決してやめません。これをまず自分にあてはめ、そして他の人に適用しましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈

主イエスのガリラヤ伝道の中に位置づけられる。マタイ、マルコにも同じ記事がある。中風の人への罪のゆるしといやし、取税人レビ（マタイ）の弟子への招き、彼の家での食事とパリサイ人との論争、断食に関する論争までが一区切りである。最後の記事は時間的に連続してはいないが、三福音書はすべて類似の論争記事として続きの位置に置いている（マルコとルカではさらに論争の記事が続く）。

パリサイ人・律法学者との関係

パリサイ人は中間時代に起源を有する律法解釈の一派で、口伝律法を含めた律法の儀式的遵守に主な関心があり、律法的な穢れに対する分離主義的傾向が強かった。新約聖書で彼らはしばしば主イエスに向かって論争を挑み、主イエスは彼らの独善と偽善を強く非難しているが、その一方で彼らは主イエスの行く先々で教えを聞くために集まっており、また主イエスを食事に招くなど深い関心を寄せている。律法学者はしばしばパリサイ人

とセットで出てくる。当時の律法学者には幾つかの学派があり、パリサイ派が多数を占めていたが、すべての律法学者がパリサイ派だったわけではなく、パリサイ派に属する人が皆学者だったわけでもない。

中心主題

罪人と積極的に交わり、彼らを悔い改めへと招く主イエスの生き方が、罪人に近づくことを拒否するパリサイ人との対比で浮き彫りにされている。この場合、「取税人や罪人」が祭儀的共同体から排除され、宗教的には社会の周縁に追いやられた人々であったことに注意する必要がある。主イエスの宣教は、社会の周縁に置かれていた人々を神の国へと招くことに強調点が置かれており、その点でユダヤ教における他の集団（特にパリサイ派）と一線を画すものであった（ボウカム参照）。

テキスト

27 その後 中風の人に対する罪の赦しの宣言といやしの記事から連続している。ここでは主イエスのことばの權威に注意が向けられている。わたしについて来なさいとの呼び掛けにレビが即座に従ったことも、主イエスのことばが權威をもって彼に働いたことを示している。取

税人は、当時ユダヤを統治していたローマ帝国に対して税金の徴収を請け負う人々である。余分な金額を徴収して差額を収入とする場合が多く、異邦の支配者の手先となっていることと併せてユダヤ社会では取税人であるというだけで「罪人」とみなされた。財産はあるが会堂（シナゴグ）を中心とする神の民の共同体からは排除されていた。主イエスは、その取税人であったレビをあえて弟子として招かれたのである。

28 すべてを捨てて立ち上がり、イエスに従った レビの応答が即時の、徹底したものであったことを示している。この直後に自分の家で大宴会を催したのだから、「すべてを捨てた」とは文字通り捨てることではなく、財産を含めた自分自身のいっさいを主イエスと神の国のために用いる決意を意味している。

29 イエスのために盛大なもてなしをした 主の招きに感動したレビの喜びがよく表れている。ほかの人たちが**大勢** マタイ、マルコはこの段階で「罪人」という単語を用いているが、ルカはその表現を用いず、30節でパリサイ人と律法学者の口から出た言葉として記録している。一方的に人を「罪人」と決めつける彼らの狭い見方

が、人を分け隔てしない主イエスの態度と対照的に描かれている。

30 イエスの弟子たちに向かって小声で文句を言った 直接主イエスに対してではなく、弟子たちに対して批判の言葉が向けられるが、答えるのは主イエスである。初代教会において主の弟子たちが同様の別け隔てのない共同の食事を重視し、ユダヤ主義者から批判されていた状況に通じている（ガラテヤ2・11～14参照）。

31 健康な人 マタイ、マルコでは「丈夫な人」。医者であるルカは元のアラム語を専門的な医学用語に訳すことでこの例えの効果を増している。

32 罪人を招いて悔い改めさせるためです 「悔い改め」の語は並行記事の中でルカのみに出てくる、ルカ文書のキーワードの一つである。罪人への分け隔てない招きが単なる食事の招きではなく、神の国に入る「悔い改め」（ギメタノイア、心の方向転換）への招きであることが示されている。

参考図書 鈴木英昭、榊原康夫、モリス、クラドック、Green、Bockの注解、ボウカム『イエス入門』、ジュリアス・スコット『中間時代のユダヤ教』。

聖書

ルカ2・41〜52

タイトル

両親に仕えるイエス

それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。

目 標

両親を大切にし、助ける者となる。

ルカ2・51

導入

(土屋開夫)

今日は母の日です。来月には父の日もあります。母の日や父の日というのは、お母さんやお父さんに対する感謝の気持ちを特に覚えるために、どちらもアメリカの教会で百年以上も前から始まりました。そう、教会から始まったんですね。

二種類の親

ところで皆さん、私たち人間には二種類の親がいるんですよ。分かっていますか？ 一つは、霊(魂)の生みの親である「父なる神様」です。もう一つは、体の生みの親である、人間のお父さんとお母さんです。

聖書には、このどちらの親も大切にしないさい、と教え

られています。みんなもよく知っている「十戒」を思い出して下さい。最初の1番目から4番目は、一言で言う

と、「父なる神様を敬いなさい」という教えです。

そして、それに続いて5番目に、「あなたの父と母を敬え。」という教えが続いています。

ですから私たちは、まず霊の親である「父なる神様」を敬い、続いて人間の両親を敬うことが、とっても大事なことです！

子どもの時のイエス様

さて、子どもの頃のイエス様はどうだったのでしょうか。今日の聖書の箇所は、イエス様が子どもの時の様子が分かる、とても貴重な箇所です。イエス様もみんなと同じように、赤ちゃんの時もあれば小学生ぐらいの時もあったんですよ。だからイエス様には、子どものみんなの気持ちがよく分かります。そしてイエス様は子どものお手本でもあるんですよ。

イエス様が12歳の時、「過越の祭り」を祝うために、人間の両親であるヨセフさんとマリアさんと一緒にエルサレムに行きました。国中の多くの人がエルサレムに集ま

5月

12日 礼拝メッセージ例

ります。親戚のおじさん、おばさん、ご近所の人たちもみんな一緒にゾロゾロと旅をします。

やがて祭りが終わり、またみんなで自分の町までゾロゾロと帰ります。ヨセフさんとマリアさんは、当然、息子のイエス様も近くを歩いているだろうと思っています。ところがイエス様の姿が全然見当たりません！ヨセフさんとマリアさんは三日間も探し回り、なんとエルサレムの神殿にいたイエス様を見つけました。

マリアさんはビックリして、「心配したじゃないの！捜していたのよ！」と言うと、イエス様は「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」と答えました。イエス様にとって「霊の親」は勿論、父なる神様です。そして、神様を礼拝する場所である神殿は「父なる神様の家」であり、子どもであるイエス様の家でもあったのです。

でもこの後、イエス様は人間の親であるヨセフお父さんとマリアお母さんと一緒にナザレの家に帰り、この両親を敬い、お父さんの大工仕事や、お母さんの家事のお手伝いをしたり、弟たちの面倒も見えてあげた事でしょう。

最初に言った通り、イエス様は霊の親である父なる神様を敬い、愛し、そして人間の両親も敬い、愛していたのです。

まとめ

みんなのお父さんやお母さんは、神様のようにには完全ではないでしょう。あなたが悪くない時でもイライラして怒ってしまったたり、ガミガミうるさかったり、間違いや失敗、言い過ぎ、やり過ぎもあるかも知れません。

それでも、神様があなたに与えて下さった両親です。そして、神様のように完全じゃないけど、足りなさもあるけど、子どもであるあなたのために一生懸命、時には必死になって、色んな事をしてくれているのです。

どうぞ、父なる神様を敬い、そしてお父さんとお母さんを敬い、大切にし、愛してください。イエス様がそうされたように！

♪わたしのように♪（ホ98、イン75、イン新5）

聖書 ルカ2・41〜52 テーマ 両親に仕えるイエス

序論

(石田高保)

福音書は、イエス様のお生まれになったことについてはかなり詳しく書いていますが、30才までについては、たった一つのエピソードしか明らかにしていません。ルカはそのほかマリアから主の生い立ちについてはいろいろ聞いていたはずですが、しかし採用したのは今日の箇所だけなのは、ここが私たちの信仰の成長のためにどうしても欠かせない出来事なのでしょう。

一、神の子としての目覚め

ここではイエス様が12才であったと明らかにされています。当時の習慣では男の子の12才は成人式を行い、大人の仲間入りをする年齢でした。主は郷里へ戻る両親や親戚の一行についていかないで三日間も神殿の中で過ごしていました。このことは常識から言えば問題なのですが、神様にはご計画がありました。主は当時第一級の学者たちと聖書について問答をしていましたが、彼らはその知恵深さに驚嘆しています。

主は言われます、〈どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であること、ご存じなかったのですか〉、これは謎めいた言葉で、〈しかし両親には、イエスの語られたことばが理解できなかった〉というのも無理はありません。イエス様はヨセフが本当の父親ではなく、神こそが自分の父であることをこの時点で悟っていたことは明らかです。まるで「エルサレムの神殿こそ、自分の父なる神の家である。だからそこに居残っているのかのようです。この出来事は主の生涯において重大です。12才の時点でイエス様はすでに自分が神の子であることに目覚めていたことになるからです。これまでは家族と一緒に帰っていました。しかしこの時を境に神の子の自覚をもって生きるようになります。なお救い主としての使命を示されることは18年後の30才まで待たなければなりません。

私たちも、イエス様を受け入れたとき、神の子とされたことに目覚め、神の家族に入れられ、そこからクリスチャンとしての成長が始まりました。私たちも父なる神様の子ですから常に父の家に住んでいることになりま

す。教会だけでなく、私たちが家庭にいるとき、そこは父の家です。私たちが職場や学校にいるとき、そこも父の家です。どこに行こうとも、そこは父の家なのです。

二、神の子としての前半生

49節は、二日間も心配で探し回った両親に対する言葉としては理解に苦しみます。イエス様は真実を語っているのですが、両親にはその意味を悟ることができません。だからと言ってイエス様は両親をさげすんだわけではなく、〈それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた〉、これはイエス様の30才までの生き方をまとめています。自分は神の子だからほかの人間とは比べようもなく偉いのだとは思わず、ヨセフの大工仕事を見習い、その後やもめとなった母と弟や妹たちを養いました。収穫期には季節労働にも行かれたかもしれせん。天地を創造した神であり、人類の救いを完成することになる神の子が、名もない一庶民としてこの地上を歩むとは、誰が想像できたでしょうか。

子どもに対する聖書の教えは「子どもたちよ、すべてのことについて両親に従いなさい。それは主に喜ばれることなのです」(コロサイ3・20)です。子どもが親に従

うようにしつけることは、その子の生涯にわたって祝福となります。なぜなら親に従うことを身につけた人は、上に立つ人を敬うことができるようになるからです。学校の先生、クラブの先輩、職場の上司など、上に立つ權威に従うことができる人は、おおむねその道で成功できると言われます。〈イエスは神と人といつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった〉、神様の約束だからです。親に従うことを身につけた子どもは、究極の權威である神に従うことができます。ところが親に従うことを身に着け損なった人は、行く所々の上に立つ人に従うことができず、概して人間関係は空回りするようです。反抗心が異常に強いと、組織では長続きしません。ですから親たる者は自分の子どもが神に従い、自分より上の權威に従えるように育てるという長期的な視野を持って臨みたいものです。

結論

人に仕えることをとおして神に仕えていることがあります。そのチャンスは日曜以外にも日常生活のどこにでも転がっているのです。

研究資料

(小平徳行)

この箇所は聖書中イエスの少年時代のエピソードを記す唯一の記事である。

テキスト

41 過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた 律法によれば、イスラエルの成年男子は年三度の宮もうでをするように定められていたが、この時代には、遠隔地の人々は過越の祭りのみに参加する習慣になっていた。過越の祭りはイスラエルのエジプト脱出を記念する祭り（出エジプト12・1～20）でアビブの月（太陽暦の3～4月に相当し、後にニサンの月と呼ばれる）に7日間かけて行われていた（申命記16・1～8）。

42 イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習にしたがって都へ上った 男子は13歳から律法を守る成人と数えられるので、前年にその予習をさせるのが父親の義務であった。このことはイエスが律法の下に生まれ、人間が神の前に置かれている立場に立たれたことを表している（ガラテヤ4・4）。

44 一行（ギスノディア） 「共に道を行く人々」のこ

とで、同郷の村人や親族、知人と一緒に都へ上って来た巡礼団。一日の道のり 数十キロ程度。

46 イエスが宮で教師たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた 当時、学者は教師の足もとに座って、話を聞いたり質問したりするならわしであった。

47 驚いていた この言葉は本福音書において、神の力が表された時に伴う人々の反応として用いられている（5・26、8・56等）。イエスの知恵は、神の恵みによる特別なものであった。

48 両親は彼を見て驚き この時イエスは両親にとっても全く思いがけないところにおられた。心配して この語は、罪人が死後行く黄泉の火炎で「苦しみもだえる」時にも使われている（16・24～25）。両親がこれほどの思いで捜し回ったのは、一行からはぐれると、身の安全が保証できないからである。良きサマリヤ人のたとえ話（10・25～37）にあるように、エルサレムからエリコへの途上で強盗に襲われる可能性があった。人々が一行で移動するのは、このような危険から守るためでもある。

49 ここはイエスの公生涯以前の唯一の記された言葉で

あり、本福音書における最初のイエスの言葉である。わたしは自分の父の家にいるのは当然であること。神を「自分(わたし)の父」と呼ぶのは他に類を見ない特異なこと。通例は「われらの父」など。前節でマリアがヨセフをさして「お父さん(直訳―あなたの父)」と語ったのに対して、イエスは神を「自分の父」と述べている。これはイエスと神との関係が特別であることを示すもので、イエス自身による「神の子」宣言である。父の家直訳するなら「父に関わること」。イエスは、自分は神に関係のある所にいるのが当然ではないかということ。当然である。この言葉は「神の必然」を表現し、キリストの受難予告(9・22)においても用いられ、「必ずしする」と訳されている。ご存じなかったのですか。かつて御使いガブリエルがマリアに神の子を産むことを告知したにもかかわらず、知らなかったのですかということ。このことは少年イエスが12歳で既に天の父の定められた道に自覚的に歩み始められていたことを表している。

50 理解できなかった この「理解する」とは、元々は「合わせる」という意味で、新しい事柄を既知の事柄と合わせて考え、理解するという意味。イエスの両親はこれ

まで自分たちに起った様々な事柄と、今回のイエスの言葉とを合わせて考えることができなかった。しかし、ガブリエルや羊飼いのたちの証言、シメオンやアンナの言葉を総合して考えるなら、確かにイエスは神の子であり、神殿はイエスの父の家なのである。

51 仕えられた は「服従させる」(ギ)ヒュポタッソー」という言葉から来ており、イエスは両親に服従する立場に自らを置かれ、継続的に仕え続けられたことが表現されている。イエスは十戒の第五戒を実践された。このイエスの従順さは公生涯に入る約30歳まで、人々からは単に「ヨセフの子」と思われるほどに徹底していた(3・23、4・22)。神の子であるお方が、人間であるヨセフとマリアと一緒に下つて、彼らに仕えられたところに、神の子イエスのへりくだりがある。これは、ある人々にとっては、キリストに対するつまずきにもなった。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』、榎原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解・新約1』(以上ののちのことは社)、宮平望「ルカによる福音書 私訳と解説」(新教出版社) など

聖書 使徒1・3～8

タイトル 聖霊降臨の約束

暗唱聖句 聖霊があなたの上に臨むとき、あなた

がたは力を受けます。そして、わたしの証人となります。使徒1・8

目標 聖霊に満たされることの必要を知り、聖

霊の恵みを求める。

導入

(後藤 真)

きょうはペンテコステです。ペンテコステは聖霊降臨日とも言います。聖霊がくだってこられたことを記念する日です。「そういえば教会では聖霊ということばをよく聞くなあ」と思った人もいるかもしれません。「聖霊って幽霊の仲間なの? こわいなあ」と心配になった人もいるかもしれません。でも大丈夫。聖霊はわたしたちに力を与えてくださるお方なのです。

よみがえられたイエス様といっしょに

イエス様は十字架にかかって死に、お墓に葬られました。でも、三日目によみがえって弟子たちのところに現

れてくださいました。そして四十日の間、何度も弟子たちの前に現れて、いっしょにごはんを食べたり、お話ししたりしました。

イエス様がいっしょにいてくださるだけで、弟子たちには勇気がわいたでしょう。イエス様は

「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父(神様)の約束を待ちなさい」

と言いました。エルサレムには、イエス様を十字架にかけた人たちがたくさんいて、弟子たちも捕まる心配がありました。でもよみがえられたイエス様が言うのなら大丈夫だと思えたでしょう。

神の国

イエス様は弟子たちに神の国のことを話しました。神の国というのは神様が王様として治める国です。そのころのイスラエルは、ローマという大きな国に支配されていました。弟子たちも、イエス様が王様になって、イスラエルが神様の国になることを願っていたのです。

弟子たちはイエス様に聞きました。

「イエス様が、王様になってイスラエルを立て直して

くださるのはいまこのときですか？」

イエス様は答えました。

「いつ、神様の国ができるのかということは、あなたがたは知らなくてよろしい。それは神様が決めていることです」。

弟子たちは、目に見えるイスラエルという国が立て直されることを考えていましたが、イエス様は世界が造りなおされる、終わりのときのことを思っていたのです。

証人に！

イエス様は続けました。

「しかし、聖霊があなたがあたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります」。

目に見えるイスラエルの国が立て直されるよりもっとすごいことがあります。それは、世界中でイエス様の証人となることです。イエス様が十字架にかかり、お墓に入り、三日目によみがえった方であることを証しする人、伝える人になることです。そして、イエス様を信じ

る人たちが、心をつにして生きていくことです。

昔の弟子たちにはイエス様を証しする力はありませんでした。イエス様が十字架にかけられたときには、怖くなって逃げ出したいくらいおくびようでした。弟子たちは弱くて、勇気がなくて、イエス様よりも自分が大事という人たちだったのです。

でも心配いりません。イエス様は、聖霊をくださることを約束して下さいました。聖霊は目に見えないけれどもいつもいっしょにいてくださる神様です。聖霊がくだるとイエス様といっしょにいるのと同じです。おくびような弟子たちであっても、どんなにまわりに敵がいても、力強くイエス様を証しする証人とされるのです。

わたしたちも聖霊に助けていただくならイエス様の証人になれます。イエス様や聖書のことばに従う力や、イエス様のことを友だちに話す力をいただくことができます。みんなでイエス様の証人にしていただきましょう。

♪輝かせよ♪（PW41、イン87、イン新108）

聖書 使徒1・3・8 テーマ 聖霊の恵みを求める

序論

(福井文彦)

使徒行伝は、単に使徒たちの活動を述べたものではありません。それは聖霊が、どのように主の弟子たちを導いて、福音がユダヤ人社会から、異邦人社会に宣教されて行ったかを記した聖霊行伝です。この個所には聖霊に關する命令と約束が記されています。

一、キリストの苦難と復活

まずルカは、イエスの死後どのようなことが起こったかを述べています。それは、イエスは苦難を受けたのち、自分が復活して生きていることを示し、弟子たちにたびたび現れて、神の国のことを語られた、という出来事です。

すなわち、イエスは、私たちのために十字架上で死なれ、人間の罪の結果である死を克服して、よみがえられたのです。それは、弟子たちの目前で起こった出来事でした。復活されたイエスは、たびたび弟子たちに現れて、

彼らが心の中で疑ったりする余地がないようにされたのです(Ⅰコリント15・5以下)。ですから、弟子たちは真正銘、復活の出来事の目撃者にほかならないのです。

イエスは復活され、四十日後に弟子たちの見ている前で昇天されました(9)。その地上の最後の四十日の期間、(神の国のことを語られた)のです。神の国は、神の恵みが支配しているところという意味です。それは、イエスの生涯と十字架と復活を通して到来しました。しかし、この神の国は、まだ完全に実現したわけではなく、イエスの再臨によって初めて神の国は完成するのです。

二、父の約束を待つて

〈一緒にいるとき〉のことです。イエスは〈わたしから聞いた父の約束を待ちなさい〉と命じられました。さらに〈ヨハネは水でバプテスマを受けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを受けられるからです〉(参考マルコ1・8)と約束されました。

この約束の言葉は、弟子たちに向かつてなされたものです。待つというのは、ある時がくるまで何もせずに待つことですが、そのような期間が弟子たちには必要でした。なぜなら、弟子たちは自らの無能無力を知り、聖霊

の力なしには宣教できないことを徹底的に知り、聖霊に満たされる必要があったからです。

この時まで、弟子たちの霊的状态はどうだったでしょう。また、サマリア地方に出かけた時、歓迎してくれなかったことに腹を立て「天から火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか」(ルカ9・54)と言いました。ペテロは主イエスを三回も「知らない」と拒みました。弟子たちは皆、主の復活されたとき、あまりの恐ろしさに震え、戸を閉めて鍵をかけて隠れていました。

弟子たちは自らの無能無力を知らされ、互いに悔い改め、約束を待ったのです。

三、聖霊を受け、主の証人となる

主から約束を待つように言われた弟子たちでした。しかし、弟子たちは「今」お会いしているこのイエスが、イスラエルを復興されるのではないかと期待していました。そこでイエスは弟子たちの質問には直接お答えにならず、二つのことをお答えになりました。一つは、時期や場合は、神が定められていること。二つには「聖霊があなたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けま

す。…さらに地の果てまで、わたしの証人となります」ということです。

①この8節は偉大な約束です。「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受け」と、言われました。聖霊は神の賜物として受けるのです。

②聖霊は偉大な力です。この「力」はギリシャ語で「デュナミス」で、いと高い所から来る力です。その力の源泉は聖霊なる神ご自身です。

③聖霊はご人格を持った「お方」です。聖霊は私たちが罪に勝利できるようにし、清い生活を送らせ、愛のわざをさせ、私たちをイエスに似た者にしてくださいます。

④聖霊を受ける時、私たちは生活を通してキリストを証し、福音を大胆に語る証人となるのです。

結論

私たちがイエスの証人になるため、必要なことは、自らの無能無力を知り、聖霊を受け、聖霊に満たされることです。この聖霊は求める者に、従う者に与えられるのですが、信仰によって受けるのです(ガラテヤ3・14)。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

3 この節は、内容的には前節の挿入句としての役割をもっており、「お選びになった使徒たち」を説明する役割を果たしている。イエスは十字架から昇天までの四十日の間に、しばしば弟子たちに自らを現され、イエスご自身が本当に死からよみがえられ、生きかえられたのであることをお示しになった。具体的には福音書やパウロの書簡（特に最もよくまとめられている箇所は1コリント15章）に記されている。**神の国** イエスの教え（1）の中心は「神の国」に関する教えであった。神の国とは、神の恵みが支配しているところ、という意味であり、イエスの生涯と十字架と復活を通して神の国が到来したと、そしてイエスの再臨によって神の国が成就することを福音書は証しするのである。

4 イエスは、前節にあるように、自らが確かによみがえられたことを弟子たちに示すため、しばしば食事を共にされた（ルカ24・41～43、使徒10・41）。**エルサレムを離れないで** 弟子たちは、この時ガリラヤに戻ることを

考えていたのかも知れない（ヨハネ21章にはそのことが示唆されている）が、イエスがユダヤ人に拒絶されたその場所で、弟子たちが聖霊による新たな第一歩を踏み出すことが神の御旨だったのであるう。

5 この約束は、バプテスマのヨハネによって予め示されている（マルコ1・8）。そしてイエスは、ヨハネのこの言葉が成就する時がいよいよ近づいた、と語るのである。旧約聖書の預言によれば、成就の日のしるしとして、神の霊がすべての人に注がれるであろう（ヨエル2・28～29）とある。ヨハネの水によるバプテスマは、悔い改めを迫ると共に、悔い改めた民をやがて来たるべき審判に対して備えさせ、預言者たちが語った霊のバプテスマをも あらかじ 予め指し示したものであった。

6 **そこで** 新しい物語の始まりに当たって、使徒の働きにおいて用いられている書き出しの言葉。**主よ。イスラエルのために国を再興してください**のは、**この時なのです**か ここで弟子たちがいう「国」とは神の国のことであって、弟子たちは旧約聖書の教えを文字どおりにとって、神の国がイスラエル民族の独立によって実現成就されるという考え方から抜け出すことはできなかった

た。この問いは、福音書においても何回か問われている問いであって（ルカ19・11、24・21）、ルカはここにきてはじめてこの問いを直接イエスにつけた。

7 前節の弟子たちの質問に対して、主イエスは直接にはお答えにならない。いつ（ギ）クロノス）とか、どんな時（ギ）カイロス） クロノスは、時間の経過を表す言葉であり、カイロスは、定められた時点を表す言葉である。特に、この個所のカイロスは、時間を支配するのが神であることを明白に示した言葉であり、この二つの言葉が重なって用いられていることは、終末に至る期間を指していると考えられる（1テサロニケ5・1）。

8 イエスは、かつて、弟子たちが考えていた政治力ではなく、それよりはるかに偉大な力が注がれるというのである。聖霊が彼らの上にくだる時に、力をいただくと言ったのである。その約束の 聖霊 は、旧約の時代から預言されていたもので（ヨエル2・28～29他）、バプテスマのヨハネによってその到来を告げ知らされていた（マタイ3・11他）。力（ギ）デユナミス） この「力」とは、単に証言する熱心さや迫力のことではなく、使徒たちが、特別に神から遣わされた者であり、主イエスがと

もに働いておられることの証拠としての「力あるわざ」（使徒2・22）のことである。また、この言葉は英語のダイナミートの語源となった言葉であり、聖霊が与える力はダイナミートのような大きな力であり、あらゆるものを粉碎し、砕く力がある。エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで 使徒の働きは、エルサレム（2～7章）、ユダヤとサマリアの全土（8～9章）、地の果てまで（10～28章）というように、使徒たちが証人として派遣される範囲をも前もって明確に示している。証人 ルカは、この言葉を「目撃者」以上の言葉として用いている。「わたしの証人」とは、ルカ24・46～48にあるように、キリストの苦難と復活と宣教されるべき救しの福音の「証人」ということである。そのために聖霊による力が必要なのである。

参考図書 A. T. Robertson 「Word Pictures in the New

Testament III」(BROADMAN) 斎藤篤美「新聖書注解 使徒の働き」「聖書講解 使徒の働き 上巻」(いずれも

いのちのことば社) 他

聖書

Iサムエル3・1～14

タイトル

幼な子サムエル

暗唱聖句

【主】よ、お話しください。しもべは聞いております。
Iサムエル3・9

目標

日々、神のみ声を聞いて生きる。

導入

(和田牧子)

皆さんはキャッチボールをしたことはありますか？片手にグローブをつけて、あいてに向かってボールを投げます。あいてはそれをキャッチして、また投げかえしてくれます。そのとき、いろいろおしゃべりをしませんか？「お、いい球だなあ」とか「今日のばんごはん何かな？」とか。今日は、神さまとはじめて会話のキャッチボールをしたサムエルさんのお話です。

少年サムエル

サムエルのお母さんの名まえはハンナさんです。ハンナにはなかなか子どもがあたえられず、そのことで苦しんでいました。泣きながら「神さま、もしわたしに男の子をくださるなら、わたしは一生のあいだその子をあなたにおわたしします」とお祈りしました。一生けんめい

熱心にお祈りをしたのです。そうして生まれてきたのがサムエルです。ハンナはサムエルを大切に育て、ひとりでも大丈夫というところになって神殿だんぐんではたらいっている祭司さいし、エリのもとにつれて行きました。サムエルは少年のころからエリのみならいとして神殿に住んではたらくようになりました。残念なことにエリのむすこたちは神さまによるこばれない罪をおかし、それをやめようとしませんでした。一方でサムエルは神さまと人のまえに一生けんめいにはたらき、すくすくと成長していきましました。

主の呼びかけ

祭司のエリは年をとり、目がかすんで見えなくなっていました。明け方あさはやく、サムエルは神さまの箱がおかれている神殿でねていました。すると主なる神さまがサムエルを呼ばれたのです。サムエルは「はい、ここにおります」と言つて、エリのところに走っていきましました。しかしエリは「わたしは呼んでいないよ。帰つて、ねなさい」と言いました。それでサムエルはもどつてねました。ところがそれと同じことがもう一度おこりました。ほんとうは神さまがサムエルを呼ばれたのに、サムエルはまだ神さまのことを知らなかったので、神さまの

み声とわからなかったのです。そうして三度目に主がサムエルを呼ばれたとき、サムエルはエリのところに行き「はい、ここにおります。エリさまがお呼びになりましたので」と言いました。そのときエリは主なる神さまがサムエルを呼んでおられるのだとわかったのです。エリは「行つて、ねなさい。主がおまえを呼ばれたら、『主よ、お話しください。しもべは聞いております』と言いなさい」とおしえました。

すると主がもう一度こられて、「サムエル、サムエル」と呼ばれました。サムエルはついにそれが神さまの声とわかり「お話しください。しもべは聞いております」と答えることができたのです。そこで神さまは語られました。「わたしはエリの家を永遠にさばくと彼につげます。それは彼のむすこたちがのろわれることをしておりながら、止めなかったためです。」

神さまのみ声を聞く

サムエルはこのやりとりをとおしてほんとうの意味で「神さまを知る」ことができました。今までも神さまの宮である神殿で一生けんめいはたらき、祭司エリに仕えていました。神さまのことも頭では知っていたでしょ

う。しかし神さまと直せつお話しできたのはこのときがはじめてでした。サムエルを愛し、サムエルの人生にふかく関わつてくださる生きた神さまが、自分に語りかけてくださったこと、それについて「主よ、お話しください。しもべは聞いております」とお返事したこと。それはサムエルにとつて大きなできごとでした。サムエルがきちんと神さまにお返事できたとき、神さまは大切なご計画を少年サムエルにお話しになったのです。

結び

お祈りはわたしたちの願いや思いを神さまにお話することです。神さまは見えないので、ほんとうに伝わっているかなと心配になるかもしれませんが大丈夫です。神さまはちゃんとわたしたちのお祈りを聞いてくださっています。それとどうじに神さまのみ声をお聞きすることでもあります。もしかしら思ってもみななかったときに、大切なことを聖書のみ言葉をとおして語られるかもしれません。いつでも「主よ、お話しください。しもべは聞いております」とお返事できるように、心の耳をすませながらすすんでいきましょう！

♪神さまの声きこえるかい♪（イン84、イン新103）

聖書 Iサムエル3・1～14 テーマ 幼子サムエル

序論（福井文彦）

サムエルはモーセ以後に出た最初の大預言者であり最後の士師です。彼が仕えていた祭司エリは老齢のために指導力と霊的な鋭さを失い、彼に代わる後継者として、神の目はサムエルに向けられていました。そのため、神は経験もないサムエルに語られます。その結果、サムエルは「神を知り」、預言者としての一步を踏み出すのです。

一、神に仕えたサムエル

ハンナには子どもがなかったが、その信仰と切実な祈りによってサムエルが与えられました。彼女は主に誓ったように乳離れした幼いサムエルをシロの聖所、エリのもとに連れて来て主にささげたのです（1・26～28）。

それ以来、〈少年サムエルはエリのもとで【主】に仕えていました。口語訳では「わらべ」とありますが、必ずしも年齢的な「幼な子」ことではなく、歴史家ヨセフスは、サムエルは12歳を過ぎていたと言っています。ところがサムエルが育ち仕えた時代、エリ家を中心とする

荒れすぎんだ状況で、人の目をくらませ、神への思いを失わせていました。すなわち、霊的に枯渇していたのです。そのことを、〈そのころ、【主】のことはまれにしかなく、幻も示されなかった〉と述べています。

しかし、サムエルは夜、熟睡している時でも、間違いはしましたが、エリが呼んでいると思えば、直ぐ起きてエリの所に飛んで行きました。その姿からもわかるように、サムエルは熱心に喜びをもって神に仕えていたのです。このサムエルに神はお心をとめられたのです。

二、神の声を聞いたサムエル

〈神のともしびが消される前であり〉とありますから、夜明け前の頃のことです。エリは〈自分のところで寝ていた。彼の目はかすんできて、見えなくなっていた〉のです。そのためサムエルは、〈神の箱が置かれている【主】の神殿で寝て〉いました。

すると、主は〈サムエル、サムエル〉と呼ばれたのです。彼はつきりエリに呼ばれたのだと思い、〈はい、ここにおります〉と言って、起きてエリの所に走って行きました。そして、〈はい、ここにおります。お呼びになりましたので〉と告げたのです。ところがエリは〈呼んで

いない。帰って、寝なさい」と彼に答えました。そこでサムエルは帰って寝ます。このようなことが二度、三度続きました。

なぜサムエルは、直接主が彼に語りかけておられるのに気がつかなかったのでしょうか。それは「まだ【主】を知らなかった」からです。サムエルの知っていた神は、日常のしきたりによって礼拝される神、エリを通して知る神でした。つまり、「主を知る」と「主について知る」とことは別なことです。「主を知る」ということは、み言葉によって、人格的、主観的な関係により、個人的に深く知ることです。その意味でサムエルは主を知らなかったので何度もエリの所に行ったのです。

三度もサムエルがエリの所に来た時、老人のエリは、ようやく主がサムエルに語っておられるのだと悟りました。それで、再び呼ばれた時は、『【主】よ、お話しください。しもべは聞いております』と「いなさい」とサムエルに教えたのです。

四度目も主は以前と同じようにそばに立たれ、サムエル、サムエルと呼ばれました。サムエルはすぐに「お話しください。しもべは聞いております」と答えました。

こうして、サムエルは生まれて初めて神の声を、神の声として聞きました。その内容は神の人エリの家への恐ろしい預言、想像を超えた厳しい宣告でした(11～14)。エリの家の咎は、いけにえによっても、穀物のささげものによっても、いかなる犠牲によっても永遠に償うことのできないものでした。

サムエルはのち、主の言葉によって現れた神を知っている者として、神の声を聞き、また神の言葉を語る預言者として、イスラエルの歴史の中で非常に大切な人物となっていたのです。

結論

私たちの信仰生涯の中で、「神の声を聞く」ことほど大切なことはありません。神は今も、サムエルのように、神の声を聞こうとする心備えのある人を求めています。

神の声を聞き続けるためには、神との交わりを持つことが基本です。そして祈りの内に神の声を聞きましょう。聖書を読んで、黙想し神の声を聞きましょう。人の声ではなく神の声を聞いて、サムエルのように自分を神にささげて従いましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 少年 子(1・22)、幼子(2・11)、などと同じ言葉。しかし、必ずしも年齢的な「幼な子」と考える必要はない。この言葉はいわゆる「若者」というニュアンスも持っており、どちらかといえば「未熟さ」を表す言葉であろう。なお、ヨセフォスという歴史家は、当時サムエルは既に12歳を過ぎていたと記録している。【主】のことはまれにしかなく エリとその息子の時代の霊的低迷を反映している言葉かもしれない。また、過去の士師の時代とこれからの預言者たちの活動の時代とを分ける意味の言葉であるのかもしれない。

2 彼の目はかすんできて エリ自身の高齢であることを示すと同時に、前週の物語よりかなりの時間の経過を示す言葉でもある。同時に4章以下の伏線ともなっている。エリの霊的な意味での「目のかすみ」を示す言葉である。またこのことが、サムエルが「聖所」に泊まってその務めを果たしていた理由とも考えられる。

3 神のともしび 出エジプト25・31〜40に描かれてい

る、7つの枝のある燭台ではないかといわれている。この燭台は、神の契約の箱が入れられている至聖所の外の聖所におかれていた。消される前 夜明け前の頃のことであろう(レビ24・3)。神の箱 神の臨在の象徴とされた箱。中には契約の石板(十戒)が納められており、「契約の箱」と呼ばれる場合も多い。ヨルダン渡河ではこの箱を先頭にして祭司が立ち(ヨシユア3・13)、カナン入国後はシロの神殿に安置された。4章ではペリシテの戦いでこの箱が戦場に出陣してペリシテに奪われてしまうのだが(4・11)、後には返還されてキルヤテ・エアリムに安置される(7・1)。最終的にはダビデがエルサレムに移した(Ⅱサムエル6・12)。サムエルは、神の箱が置かれている【主】の神殿で寝ていた 前節にも記述しているように、エリの高齢のゆえかもしれないが、そのことをも主が用いてくださったって、サムエルの召命という出来事を主が起こしてくださったとみるべきであろう。イザヤの神殿の幻(イザヤ6章)、ベテルにおけるヤコブの幻(創世記28・11〜18)にも、神殿における召命は見えて取れる。

4 聖書によって多少訳し方が異なるが、内容そのもの

には大差はない。

5→9 このような物語の中で、反復の意図するところは重要である。これは、緊張感を高め、召命に対する現実感を聴衆に呼び起すのに一役買っている。一方で、祭司エリは勘違いをして3度にわたってこの少年を下がらせる。先週の個所と相まって、善良ではあるが霊的に少々抜けているエリの人柄を描き出している。

7 **【主】を知らなかった** 一般的な信仰や敬虔さの意味ではなく、個人的直接的語りかけ、という意味の「知る」。本節では、「主を知る」ということと、「主のことば」とが並んで語られる。それは、主を知るということは、人間の知覚的、客観的な対象として「主を知る」ということではなくて、その御旨をみ言葉によって知るという、人格的、主観的な関係における「知る」ということなのである。

9 前節後半より、エリはサムエルの上に起こっている出来事を自らの経験によって察した。こうしてついにエリはサムエルに適切な指示を出すことができたのである。

10 **【主】が来て** 語りかけるばかりでなく、目に見える形でそばに立った、すなわちここでサムエルは、言葉

と幻の両方を受けたのである。この行為は、「お話しください。しもべは聞いております。」という信仰の姿勢に対する語りかけである。

11 **両耳が鳴る** 想像を超えた厳しい宣告がなされるときの表現である。特に、災いの知らせやその知らせに圧倒されるときに慣用的表現でもある（Ⅱ列王21・12、エレミヤ19・3）。

12→14 エリは最後には、その息子たちと共に破滅の道へと歩まなければならない。これは恐ろしい現実である。彼の罪は、息子たちが何をしていたかを知っていたにも関わらず、彼らのその行いを見過ごし続けてきたからである。エリの家についてわたしが語ったこと 2・

27→36。祭司の罪のためには犠牲の儀式によって備えがなされていた。しかし、それはあくまで誤って犯した罪のためである（レビ4・2）。しかし、エリの息子たちが犯した罪のように、彼らの冒瀆的な行為^{ぼうとく}に対しては、いかなる犠牲によってもとりなすことは不可能であった。永遠に その裁きが徹底してなされることを物語る。

参考図書 ジョイス・G・ボールドウィン『ティンデル聖書注解 サムエル記』（いのちのことば社）他

聖書

Iサムエル16・6〜13

タイトル

ダビデの油そそぎ

暗唱聖句

人はうわべを見るが、【主】は心を見る。

Iサムエル16・7

目標

心を見られる神に喜ばれるように生きる。

導入

(土屋開夫)

「人は見かけによらない」とよく言いますが、私たちは人の外側しか見れないので、その人の心や性質まではなかなかスグには分かりませんね。例えば、とてもニコニコした顔をしているから「良い人なのか」と思ったから、実は悪い人だったり。全然、笑わないから「恐い人なのか」と思ったら、実は優しい人だったり。

前にこんなことがありました。ある風の強い日、道を歩いていたら、後ろの方からトラックが大きな音でクラクションを何度も鳴らすのです。私は「うるっさいなあ。何をブーブー鳴らしてるんだ!」と思っていたら、そのトラックの窓からおじさんが顔を出し、私に向かってこう言いました、「帽子、落ちましたよ!」風でいつの間に

か私の帽子が飛んでいたのを、教えてくれようとしていた親切な人だったのです。「あ、本当だ。どうも!」

そのように、私たちはなかなか人の心の中まで分からないのですが、神様は人の心の中をご覧になるお方なのです!

新しい王を見つけない

さて皆さん、イスラエルの国で一番最初の王様になった人は誰か、覚えていますか? そう、サウル王です。でも本当の意味では、イスラエルの真の王様は神様なのです。でも、イスラエルの民が「いや。どうしても、私たちの上には王が必要です。」と言って、他の国のように人間の王様を求めました。それで、仕方なく彼らのリクエストに答えて、一人の王を選んだのです。それがサウル王でした。サウル王は背が高く、イケメンで、見かけはとてもカッコよかったのですが、肝心なことが欠けていました。それは「神様に聞き従う心」が欠けていたのです。

そこで神様は、サウル王の代わりに新しい王となる者を捜し、選ばれました。その人はベツレヘムのエッサイ

という人の息子だと言うのです。神様はサムエルさんをエッサイさんの元に遣わされました。

神様が選ばれる人

けれども大変です。エッサイさんには息子がたくさんいるのです。一体、どの息子が新しい王様選ばれた人なのでしょう？

私たちも、たくさんの中から一つの道を選ばないといけないことがあります。将来は結婚相手を探すかも知れません。そういう時は、外見で決めてはいけませんよ。人の「心」をご覧になる神様によく聞くことです！

さて、サムエルさんの前にエッサイさんの息子たちが連れて来られました。その中でサムエルさんは、一番上のお兄さんであるエリアブさんを見て、「きつとこの人が神様に選ばれた人に違いない！」と思いました。「長男だけあって人生経験も一番長いし、しっかりしていそうだし、背も高い。戦いの時でも一番強そうだ。」そんなふうに思ったのかも知れません。

けれども神様は、「彼の容貌や背の高さを見てはならない。……人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」

と言われました。そうして7人の息子が連れて来られましたが、神様が選ばれた人はいませんでした。

でも、まだ8人目の末っ子が残っていました。父親のエッサイさんも「あんなチビっ子は紹介する必要もないだろう」と思っていたかも知れません。でもその子が来た時、神様は「さあ、彼に油を注げ。この者がその人だ。」(16・12)と言われました！それがダビデでした。

神様はダビデの心の中を見ておられました。ダビデには、神様をおそれ敬い、聞き従う心がありました。それは何より一番大切なものです！それはまるで羊が羊飼いにどこまでもついて行くのに似ています。

まとめ

さあ、私たちの心の中はどうでしょう？羊飼いであるイエス様についていく羊のようでしょうか？でも、こうしてみんなが教会学校に来ているということは、実はみんなもイエス様から既に選ばれているんですよ！

♪主は僕らを用いてくださる♪(PW59)

聖書 Iサムエル16・6～13 テーマ ダビデの油注ぎ

序論

(福井文彦)

イスラエルの最初の王であるサウルは、神への不服従のため主から捨てられました。サムエルはこのことをひどく悲しみましたが、いつまでも悔やみ続けることは許されませんでした。現実にはサウル王がまだ支配しているにも関わらず、神は次の王を選ぶようにサムエルに命じられたのです。そこで選ばれたのがダビデだったのです。

一、人の選び

サムエルは神がサウルを捨てられたことを悲しんでいました。すると、「さあ、わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところに遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから」(1)と告げられたのです。そこで、サムエルはベツレヘム人エッサイのところに出かけました。

主は、サムエルに、どの息子に油注がれるかを明らかにしておられませんでした。エッサイの息子たちを見た時、サムエルは直感的に、神が選ばれたのは長男エリア

ブであると思ったのです。彼は背が高く、外見的には申し分がなく、王者の風格があったからです。年老いた父親も選ばれるのは長男であると考えていました。

ところが、主はサムエルに「人が見るようには見えないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る」と言われたのです。そこで「エッサイはアビナダブを呼んで、サムエルの前に進ませ」ました。するとサムエルは「この者も【主】は選んでおられない」と言いました。そこでエッサイはシャンマを通らせましたが、サムエルは「この者も【主】は選んでおられない」と言いました。エッサイは七人の子にサムエルの前を通らせますが、サムエルは「【主】はこの者たちを選んでおられない」と言ったのです。

二、主の選び

神はこの家族を指示されたのに、その中に王に選ばれる者がいないなどということがあり得るのだろうか、サムエルは一瞬思ったことでしょう。そこでサムエルはエッサイに「子どもたちはこれで全部ですか」と尋ねました。するとエッサイは「まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています」と答えました。彼は、兄たち

がいけにえの食事を楽しんでいる間、羊の番をしていたのです。

この末の子がダビデです。彼がいけにえの席に呼ばれなかったのは未成年者はいけにえの食事の席につかないというしきたりのためかもしれません。しかも、羊を飼うことは、その家の最も大切にされていない家族が召使がする卑しい仕事でした。ですから、彼は家族の中でそれほど気にとめられていない一員であつたと思われま

す。しかし、神が人をお選びになる時、「外見」は関係ありません。神にとって問題なのは「心」です。それで、人が見るようには見えないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る」と言われたのです。その意味は、「人は自分の目に従つてものを見るが、神はご自分の心に従つて見られる」と言うことです。人間の弱さを知り尽くしておられるお方として、あわれみに満ちた心によって見られた結果、ダビデを選ばれたのです。

三、心を見られる神

ダビデへの油注ぎと同時に、主の霊がダビデの上に激しく下りました。後にサウル王の侍従となり、ゴリヤテとの戦いで勝利し、名声は全国にとどろきました。しか

し、このために王のねたみを買ひ、ここからダビデの苦難の生活が始まつたのです。十数年の苦難の後、ギルボア山頂でサウル王が戦死し、ダビデは王となります。そして、エルサレムを礼拝の中心として、政教一致をはかり、敵国を徹底的に撲滅し、王国の拡張と繁栄をもたらします。彼の成功の秘訣は、ただことごとくに主に聞いて行うことでした(Ⅱサムエル5・17〜25)。

しかし、このダビデにも失敗がありました。バテ・シエバの事件、子どもとの血を血で洗うような争いです。また晩年ダビデの行つた人口調査は神の怒りと裁きを招きました。ダビデは偉大な指導者でしたが、このように完全無欠ではありませんでした。しかし、絶えず砕かれた心をもつて悔い改め、神の赦しと恵みにあずかりました。それゆえに、神に愛されたのです。神は心を見られますが、偽善でない心、砕かれた心、混じりけのない純粹な心で神を求める人を喜ばれるのです。

結論

心を見られる神に喜ばれる秘訣は、キリストの血に対する信仰(ヘブル9・13〜14、Iヨハネ1・7)と純粹な心で神を求めることです。

研究資料

(宮澤清志)

本日の聖書の個所はⅠサムエル16・6からであるが、意味としての区切りは1節から始まる。サムエルはサウルの失敗をいつまでも悔やみ続けていることはゆるされなかった。主はサウルを退けるだけで、王位自体の存続については御心を変えることなく適材を探し求められたのである。

一方サムエルは非常に恐れた。なぜなら、このことがサウルに見つかれば殺されてしまうのではという恐れがあったからである。しかし、天の下すべての事は、神のイニシアティブのもとで進行する。私たちの信仰は、このイニシアティブをとられる神に全権を明け渡し、注意深く、かつ大胆に従っていく信仰でなくてはならない。本日の中心であるダビデへの油注ぎの個所も、神がイニシアティブをとられた典型ともいえる個所であり、その従い方は、形だけの従い方ではなく、心からの従い方ではなくてはならないのである。

テキスト

6 エリアブ 「神は父」という名。サムエルは、エリアブの容姿や身体に強い印象を受け、彼こそが油注がれるにふさわしい人物であると判断した。

7 彼の容姿や背の高さを見てはならない サウルが誰よりも背が高かったこととの意図的な対比が語られているのかもしれない。しかし、この容姿が、彼が適任であることを妨げるものではない。外的な容姿それ自体は神からの好意のしるしである(9・2、10・23のサウルの姿や12節のダビデの姿を参照)。人が見るようには見ない 直訳は「人が見ることではない」この言葉は預言者の格言となつたのであろう(Ⅰ歴代28・9参照)。人はいわべを見るが、主は心を見る サウルは誰しもが賛美する背の高さ、美しさによって選ばれたが、ダビデは「心を見る」主によって選ばれた。

10 七人の息子をサムエルの前に進ませた サムエルはエッサイの7人の息子を年齢順に通らせたのであろうが、その誰も、主はお選びにならなかった。具体的に、サムエルは神意を伺うのにどのような方法を取ったのかは定かではないが、彼はサウルを選ぶにあたってはくじ

を用いた(10・20参照)。よって今回もくじを用いて神意を伺ったであろうことは推測できる。こうして彼はこの7人の息子のほかにも子がいたのであらうと推測したのであらう。なお、この当時の神意を測る一般的な方法は、くじであつた。

11 まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています。父エッサイがダビデをこの席に呼ばなかったのは、当時のしきたりで未成年者はいけにえの食事の席にはつかなかつたということが考えられる(5節には、サムエルがこの席を設けた理由が語られる)。しかし同時に羊を飼うことは、その家の最も大切にされていない家族が召使に託された卑しい仕事であつた。

12 血色がよく、目が美しく、姿も立派だつた。ここに、いわゆる「紅顔の美少年」という言葉当てはめるべきではない。当時、こうした外見上の美しさは神の恵みと考えられていたし、サウルもまたそうであつた(9・2)。しかし、聖書における美しさとは、外形上のことだけでなく、優美な魅力と強い意欲、行動をも伴つたものであつた。イザヤ53章の主イエスのお姿をここで思いめぐらすことは必要なことであらう。

13 彼に油を注いだ。旧約聖書においては、王と祭司は頭に油を注がれる行為をもつて就任した。この油注ぎは、神の代理者をもつて行われた。この「油注がれた者」が神の民を統治するとき、神は油注がれた者を通して王権を行使されたのである。その結果、「主」の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下つた。将来において何が待っていようと、神の備えがあるということの確信となり、また保証ともなつた出来事であつた。

なお、この言葉とともに、次節の「主」の霊はサウルを離れ去り：」という言葉も同時に思いめぐらすべき言葉である。

参考図書 ジョイス・G・ボールドウィン『ティンデル聖書注解 サムエル記』、榊原康夫「新聖書注解 旧約2『サムエル記第1』」(以上のちのことば社)、山我哲雄「新共同訳旧約聖書注解Ⅱ『サムエル記上』」(日本基督教団出版局)他

聖書

マタイ6・25～34

タイトル

神さまを信頼しよう。

暗唱聖句

野の花がどうして育つのか、よく考えなさい。
マタイ6・28

目標

必要を備えてくださる神を信頼し、心配しないで生きる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは心配しやすいタイプですか？ 心に心配があると、気持ちが悪くなりますね。今朝、イエス様は「心配するのはやめなさい」と言われます。

心配する私たち

皆さんは今、何か心配になっていることがありますか？ 来週の天気のこと。勉強のこと。学校での友達関係のこと。自分の将来のこと。家族のこと。自分の健康のこと。好きな人のこと等々。あげると切りがないと思います。心配があると、それが頭の中にぐるぐる回り、目の前のことが手に付かなくなることもあります。時には何もしていないのに、心配で気持ちや体が疲れてしまうことがあります。イエス様は「心配するのはやめな

い」と言われます。「イエス様、そう言われても心配してしまいますよ！」と言いたくなるでしょう。そうです！ 私たちは弱く心配しやすい者であることを認めましょう。それは開き直りやあきらめではなく、自分のありのままの姿を受け止めることです。その時はじめて「イエス様、心配なことで頭がいっぱいです。どうしたら良いですか？」とイエス様に祈ることができます。

備えてくださる神さま

心配が頭を支配しているとき、友だちから「心配しなくてもいいよ」と言われ、「その理由は？」と聞くと、「心配するだけ損だから」と言われたらどう思いますか？ 理由が分からないのに「心配しなくても大丈夫！」と言われても、ピンと来ないですよ。イエス様は心配しなくてもよい理由を自然界の営みを通して教えてくださいました。自然は神さまが造られたもので、神さまの大きな御手の中にあります。ある方が「自然は第二の聖書だ」と言いましたが、自然を通して神さまの素晴らしい恵みを知ることができます。イエス様はまず「空の鳥を見なさい」と言われます。鳥は自分で種もまかず、刈り取りもせず、倉におさめることもしません。でも、神さまは

6月

9日 礼拝メッセージ例

ちゃんと鳥たちを養っておられます。6月には綺麗な草花が生き生きと咲いています。イエス様はこの草花にも目を向けられ、神さまが草花を綺麗に装ってくださるのです。空の鳥も野の草花さえも神さまはしっかりと養ってくださっているのです。そうであるなら、神さまが愛して止まない私たちを養って下さらないはずはありません。また、神さまは私たちの必要をすべて備えてくださる方です。

皆さんのこれまでの生活を振り返ってみてください。一週間、何も食わずに生活したことがありましたか？着る服がなくなったことはありませんか？勉強が分らなかったとき、誰かに教えてもらったことはありませんか？体調が悪くなったり怪我をしたりして、病院で治してもらったことがあるでしょう。あなたを愛される神さまは、あなたのすべての必要を知っておられ、必要なときに必要なものを備えてくださるのです。

神さまを信頼して歩む

神さまは、私たちがいろいろなことで心配してしまうことをよくご存知です。「何度いったら分かるんだ！心配するなって言っただろう！」と、私たちを責めるお

方ではありません。心配するたびに「ほら、空の鳥や野の花を見てみなさい。これらを養い装っているわたしはあなたのことを知っているよ。あなたの必要なものも備えているよ。心配せずに、ただわたしを信頼していなさい」と繰り返し語ってくださいます。

もし、心配することがあったら、自分を責めたりしないで、また心に蓋をしないで、正直に「神さま、僕は今、〇〇のことで心配して苦しくなっています。助けてください」と正直に祈りましょう。そして、ふと空を仰いでみましょう。野の草花を見てみましょう。

まとめ

心配事はいつもつきまといますが、すべてを知って下さり、すべてを備えてくださる神様と共に歩んでいきましょう。

♪小鳥たちは♪（ホ85、こ10、こ改10）

聖書 マタイ6・25～34 テーマ 思い煩いからの解放

序論

(福井文彦)

人間が毎日生活していく上で食物や衣服は必需品です。イエスは空の鳥を養い野の花を装ってくださる天の神が配慮し、それらを与えてくださるのだから、その神を信頼して〈心配したりするのはやめなさい〉と戒められました。

一、神への信頼

イエスはまず〈空の鳥を見なさい〉と言われました。彼らは生活のために働くことは全くありませんし、食べ物や蓄えたりもしません。その彼らを神は養ってくださるのです。彼らは天の父が与えられるものを集めるだけです。まして、神は人を鳥よりも、〈ずっと価値がある〉者として創造されたのですから必ず養ってくださいます。だから、ただ神を信頼することです。

次にイエスは〈野の花がどうして育つのか、よく考えなさい〉と言われました。野に咲く花は〈働きもせず、紡ぎもし〉ないのです。それでも神は〈ソロモン〉の〈栄

華〉、その人工美よりも、美しく飾られました。神は人よりも劣るものをこのように装われるなら、人間にもっと深い配慮をなさるはずですから、ただ神を信じることでです。

人は働き、紡がなければなりません。しかし、これら一切のことをなし終えたら、あとは神の摂理にすべてを託すべきです。人は空の鳥を養われ、野の花を美しく飾られるのは〈天の父〉であるという信仰をもって、神に信頼することです。

二、思いわずらいをな

25節から34節には〈心配する〉(口語訳では「思いわずらう」)が6回出ています。それに対してイエスは〈心配する〉ことが不要である理由を語っておられます。

①神は造られた〈空の鳥〉〈野の花〉を養ってくださるのですから、それらよりすぐれた私たちを養ってくださるのは当然です(26、30)。

②私たちはいくら〈心配し〉ても〈自分のいのちを延ばすことができないのです(27)〉。人間の寿命は神が定められることです。いくら思いわずらっても、少しも延ばすことはできません。それと同じように、いくら

〈心配し〉ても問題の解決にはならないのです。

③父なる神は食物や衣服（人間の生活必需品）が私たちに必要なことをすべて知っておられます（32）。そのため愛をもって配慮し備えてくださいます。神は決して物質的な必要を軽視したり、無視したりはなさらないのです。だから心配するよりもまず神を信じることです（8）。

④あすのことを思いわずらってはならないのです（34）。人生にはその日その日の苦労があるのですから、一日一日の責任を果して生きることです。〈明日〉（未来）のことは、神がご支配しておられるのですから思いわずらう必要がないのです。

三、まず神の国と神の義を求める

そこでイエスは〈まず神の国と神の義を求めなさい〉と命じられました。〈神の国〉とは神のご支配のことであり、〈神の義〉とは神の正しさのことです。ですからそれは、私たちの生活と周りのすべての事において神の御支配と、神のみこころと栄光の現されることを求めて生活することです。言い換えると、自分中心の生き方ではなくて、神を主にして自分を従とする生き方です。それ

は、神に信頼し、服従して生活することです。

〈そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます〉とイエスは約束されました。

〈これらのもの〉とは食物や衣服だけではありません。私たちが人間として生きて行くときにはそうした物質的な必要のほかに、非物質的な皆さんの必要がありますが、それらも含まれています。例えば、健康、知恵、才能、霊的なものもそうです。それらはみな、人間は神によって生かされているものであるとの自覚に立って、神に信頼し、服従して歩むなら備えられると、イエスは言われました。そのような生き方こそは私たちを〈心配〉から解放して、平安を与え、神の目標に向かって働くものとするのです。

結論

最も大事なことは、〈神の国と神の義〉を求めていくこと、すなわち、神に信頼し、服従して生活することです。そうすれば、食物や衣服という物質的なものだけでなく、霊的なものにおいても、空の鳥を養い、野の花を装われる天の父は、豊かに与えてくださいます。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

25 何を食べようか何を飲もうかと、…何を着ようか
この当時の思いわずらいのものは、食べ物、飲み物と着るものだったようである。イエスは、これらの思いわずらいの代表的な要素を並べ立てて、思いわずらってはならないとお命じになったのであろう。心配したり もとの意味は「いろいろな部分に分裂する」という意味の言葉である。また、この言葉はそのような思いわずらいを中止せよ、という強い命令形で述べられている。ルカの福音書第10章に登場するマルタは、まさにこのような状況だったと言える(ルカ10・41〜42)。彼女は、なくてはならないただ一つのことには心を傾けるのではなく、必要ではない多くのことに心を裂かれていた。

26〜27 私たちが読み違えてはならないことは、この節は、前節からの「思いわずらいからの解放」という文脈に沿って読むべきであって、空の鳥のたとえを人間の労働にからめて読むではない。空の鳥 ルカの並行記事では「鳥」となっている(ルカ12・24)。種時きもせ

ず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません 農業におけるこれらの行為は、当時、男性の代表的な仕事とされてきた。したがって、この節では、男性に対する思いわずらいからの解放を述べているのであろう。あなたがたは(26) 強調された言葉であり、鳥に比べてあなたがたこそ、という意味合いの強い言葉であらう。自分のいのち(27) ある英訳聖書では「自分の身長」という別訳をつける。いずれの訳も成り立つが、文脈上、「いのち」のほうが自然である。

28〜30 こちらも前節までと同様に、「思いわずらいからの解放」という文脈の中で読むべき箇所である。野の花 新改訳第二版では「野のゆり」となっているが、本来の意味は「野生の花」という意味であり、特定の花を指す言葉ではないようである。紡(ぎ) この仕事は当時の女性特有の仕事だったようであり、前節までの男性と併せて、女性にも思いわずらいからの解放を、野の花のたとえを通して語られたものであろう。いずれにしても、重要なことは、野の花が短命であるにもかかわらず(30)、神はそれらを着飾らせ、養っていて下さる、ということである。信仰の薄い 「信仰がない」と語られ

ていないことに注意したい。直訳すれば「信仰の小さい(少ない)者」という意味である。この言葉はマタイが好んで用いた言葉で(8・26、14・31、16・8、17・20、他にはルカ12・28のみである)、いずれも弟子たちだけに用いられた言葉である。具体的には、信じるとは言いがらも実際はまったく信じていないことを指す言葉であって、信仰の不完全とか未熟さを表す言葉ではない。

31 心配しなくてよい 25節の言葉とは文法的に少々異なり、更に強い禁止の言葉となっている。

32 これらのもの 原文ではこの言葉が文頭に置かれている。これらのもの、すなわち食べ物、飲み物、着るものなどが強調して語られている。**異邦人** ここでいう異邦人とは、ユダヤ人に対する異邦人という意味ではなく、天の父を知らないすべての人々を指す(5・47、6・7)。

33 これまでは「思いわずらうな」という、神の民の消極的な生き方を取り上げてきた。この節は、一歩進んで神の民の積極的な生き方を述べる。神の国 神がご自身恵みをもって支配されることであり、また「天の神がご支配される力強い出来事」(織田)を指す。更に、山上の説教との関連で語られるなら、主の祈りを真に生き、

祈る神の民の姿として現れる。**神の義** 全被造物に対する神の救いの御計画とみることができ。求めなさい求め続けるように、という意味。この命令は、生涯をかけて人間が求め続ける必要があるものである。**与えられます** (神によって) 加えて与えられる、たくさん与える、という意味の言葉であり、神は、求める人に対して、その人に必要なものを備えて下さる、という意味をもつ。

34 ルカの並行記事には存在しないマタイ独特の言葉。 思いわずらうてはならないことを再度警告されたのである。人間にとつては「明日」という日は死ぬまで存在する。しかし、明日のことは誰にもわからない。ゆえに、このわずらいから解放される道は、明日を支配される神を信じて、その神に自分のすべてを明け渡すことである。

参考図書 増田誉雄『マタイの福音書』新聖書注解 新約1(いのちのことば社)、高橋三郎『マタイ福音書講義(中)』(教文館)、他

聖書 マタイ7・7～12

タイトル 天の父への祈り

暗唱聖句

天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくだらないことがあるでしょうか。

マタイ7・11

目標

祈りに答えて良いものを与えてくださる天の父なる神を信じる。

導入

(和田牧子)

皆さんは何か「こうなったらいいな」という願いはありますか。お誕生日に新しいゲームがほしいなとか、ちかわのバッグがほしいなとか…。大きくなったら野球選手になりたいなとか、パティシエになりたいなとか…。まずはその願いを神さまにお祈りしてみしましょう。神さまは皆さんがお祈りしてくれるのを楽しみに待っていてくださっていますよ。

あきらめないで祈る

お祈りとは神さまとお話することです。神さまが何を話しているか、まず「お聞きすること」で

もあります。神さまはわたしたちに何て語りかけてくださっているでしょうか？

今日の聖書箇所ではイエスさまが「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます」と語られています。イエスさまが私たちに願っておられることは、「あきらめないで求めなさい、探しなさい、ドアをたたき続けなさい」ということなのです。三回もちがう言葉をつかって、わたしたちに祈り続けることの大切さを語っておられます。それは「わたしはあなたのお祈りを聞いているよ」「あなたの祈りに必ず答えるから」という神さまの力強い約束なのです。

神さまは良いお方

皆さんの家族、お父さん、お母さんは、皆さんが毎日元気にくらしていけるように、一生けんめい働いたり、家事をしてくれているでしょう。皆さんが生まれてきたことをよろこんで、誕生日にはお祝いをしてくれるでしょう。毎回の食事や着るものも大人の人が用意してくれるからこそ心配しないで生きていけます。今日の聖書箇所にも「あなたがたのうちのだが、自分の子がパン

を求めているのに石を与えるでしょうか。魚を求めているのに、蛇へびを与えるでしょうか」とあるとおりです。

それでも大人は子どもの気持ちをわかってくれないなあとか、怒られてばかりでいやだなあと思ったりすることもあるかもしれません。大人であつてもまちがったり、悪いことをする人もいます。

しかし、「求めなさい、探しなさい、たたきなさい」とおっしゃっている天のお父さまは、だれよりも皆さんの気持ちをわかっておられ、その必要をご存じで、いちばん良いものを準備して、いちばん良いときに与えてくださる方なのです。何といつても、この世界を創造し、人間を創造し、わたしたちを愛して、ひとり子であるイエスさまをこの世界にあたえてくださったほどの方ですから！

良いものとは？

このお話しの最初に「まずその願いを神さまにお祈りしてみましよう」と言いました。たとえば「〇〇中学にぜったい合格しますように」とお祈りすることもあるでしょう。しかし残念ながら不合格だったとしたら？「ああ、やっぱり神さまなんていない。祈ってもきかれ

ない」と思うかもしれません。でも、「だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます」と約束されています。この約束を信じてあきらめないで祈り続けることが大切です。この天地万物を造られた神さまは、小さな私わたしたちの思いをはるかにこえて、わたしたちにとっていちばん良いものを知っておられます。ですからちがったかたちで、もつともつと良いかたちでわたしたちの祈りが聞かれるということがおこってくるのです。失敗したなうと思うことがあつても、そういう失敗やミスでさえも良いことに変えて、さらに良い道を開いてくださるのが神さまなのです。

結び

先生も子どもときから神さまを信じて、たくさんのお祈りをしてきました。お祈りしていたらすぐに聞かれてビックリしたこともあります。祈りはじめて、30年後に実現じっげんしたということもあります。大切なことは「どこまでも良いお方」であるイエスさま、そして天のお父さまを信頼し続けることなのです。祈り続けましょう！
♪祈ってごらん わかるから♪

(イン70、イン新85、新聖歌481、P W 7、G S 35)

聖書 マタイ7・7-12 テーマ 天の父への祈り

序論

(福井文彦)

私たちは神の子とされ、神の子の霊を与えられ、「天のお父さま」と言って祈ることができ者にされたのです。そのために大切なことは、本当に必要であるとの告白を与えてくださるのは天の父なる神であるという信仰の確信です。

一、祈り求めよ

イエスは祈り求めなさいと言われました。しかも〈求め〉ということばを一度や二度でなく、五度も繰り返し、祈り求めることの大切さを教えられました。そして、その祈りが聞かれるために〈求めなさい〉〈探しなさい〉〈たたきなさい〉と。そうすれば、〈与えられます〉、〈見出します〉、〈開かれます〉と約束されたのです。すなわち、三重の異なった動詞をもって、祈りが答えられる確かさを示し、疑いを持つことなく祈り求めなさいと教えられたのです。多くの人々は祈っても、それが本当に聞かれるという信仰の確信を持っていないのではないか

と思います。それは天の父なる神が答えてくださるとの信仰を持つていないからです。

しかし、人は誰でも銀行で金銭の取引が、郵便局では郵便物の手続きが、食料品店で食物を求めることができますと納得することができます。そのように祈りというのが、神に聞かれ、応えられるとの信仰の確信を持つている人は、誰からも強制されなくても祈るものです。

二、求め続けよ

イエスは、落胆しないで、目的を果すまで祈り続けなさいと三つの動詞で教えておられます(7)。すなわち、〈求めなさい〉〈探しなさい〉〈たたきなさい〉です。この〈求めなさい〉〈探しなさい〉〈たたきなさい〉ということばは、原文では、「求め続けなさい」、「探し続けなさい」、「門をたたき続けなさい」という意味があります。ですから、〈求め〉でも与えられないからといって、あきらめてはいけません。もし、〈求め〉でも与えられないとするなら、もっと自分から積極的に〈探し〉してみなさい。それでも見出せなかつたら、放っておかず手から血が出るまで門を〈たたき〉続けなさいということです。

そのことはイエスご自身の祈りの生活の中にも見られ

ます。主は早朝、人を避けて祈られ（マルコ1・35）、徹夜で祈られました（ルカ6・12）。特に、十字架の前夜のゲツセマネの祈りでは、血のしたりのような汗を流して祈られたのです（ルカ22・44）。その祈りは非常に激しいものであったとヘブル人への手紙に記されています（5・7）。イエスはこのようなご自分の体験を通して、祈りが神に聞かれるためには、「求め続けよ、探し続けよ、門をたたき続けよ」と、あきらめずに熱心に求めて祈ることを教えられたのです。

三、祈りに答えてくださる天の父

イエスはここでは、祈りに答えてくださる神を、地上における子どもと父親にたとえておられます（9～11）。私たちがイエスの御名をもつて祈るとき、私たちと神との関係は奴隷と主人、富める者と貧しい者のような関係ではありません。父と子との関係であり、しかもこの世の親子関係以上の関係なのです。

自分の子どもがパンを求めたときに石を、魚を求めるときに蛇を与える父親はいないでしょう。〈あなたがたは悪い者であつても〉とは、心が墮落して弱さと悪を持ち合わせている者であつても、の意味です。それでも〈自

分の子どもたちには良いものを与えることを知っている〉のです。それは父親の愛のゆえです。ましてや天の父なる神は愛の源であり本体であり、善にして人の心を深く洞察できるお方です。ですから、肉親の父親以上に〈求める者たちに、良いものを〉くださるお方なのです。

神は良いものだけをお与えになるお方であり、神がお与えになるものは、いつも決まって最善のものです。だから私たちは大きな願望をもつて神のもとに行き、必要としているものを求め、しかも不動の信仰をもつて、神が良いものを与えてくださるようと願うことができるのです。神は私たちをこの上なく愛しておられるので、正しく歩む者に有用有益なものをくださるのです。神は、私たちに最善なものが何であるかをご存じですから、その最善のものを与えてくださいます。

結論

人間の親子関係でも、子どもは屈託なくどんな心配事でも父親のもとに持って行きます。そのように、私たちも天の父なる神に熱心に祈り求めましょう。神が祈りに答えて良きものを与えてくださることを信じて祈り求めましょう。

研究資料

(中島啓二)

求めよ、探せ、(門を) たたけという三重の命令は、父なる神に対し揺るぎない信仰を持って祈るようという招きである。親の愛は地上における大きな愛の代表と言えるが、天の父はそれすらも比較にならないほど真実な愛を注いでくださるお方である。「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい」との黄金律は、その神からの真実の愛を受けているという大前提があつてこそ、意味を持つものである。

テキスト

7 求めなさい…探しなさい…たたきなさい… 三つの命令はすべて現在形で、「続けよ」と動作の継続が命じられている(ルカ11・8、18・3参照)。並行箇所であるルカ11章では、この命令の前に、長旅で疲れた友人のために隣人にパンを求める人となえが語られている。求め、探し、たたくという三つの動作に段階を見いだす解釈もあるが、外してはならない中心的なポイントは、「とにかく熱心に祈り求めよ」ということであろう。「あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたし

を求めるなら、わたしを見つかる」(エレミヤ29・13)との約束でも、「心を尽くして」求めることが条件とされている。そうすれば与えられます…見出します…開かれま

す これらは「神的受動態」と呼ばれ、与え主は言うまでもなく神ご自身である。

8 だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます 21・22の「信じて祈り求めるものは何でも受けることになります」との約束と比較するとき、そちらの約束が「もし、あなたがたが信じて疑わないなら」(21・21)と条件付きであるのに対し、こちらは「だれでも、求める者は」と無条件であることは注目すべきである。逆に、祈りの答(与えられるもの)の具本性について見ると、21章では、山が海の中に移るといような奇跡さえも含む「祈り求めるものは何でも」(21・22)であるのに対し、この7章では、与えられ、見出し、開かれる、との三つの動詞には具体的な目的語が示されていない。このことは、この箇所での強調点が、与えられる「良いもの」(11) 自体ではなく、ご自身の民の必要を満たしてくださる「神の真実さ」に置かれているということを示すと考えてよいだろう。

9～10 パンや魚はガリラヤ地方の日常の食物である。パンを求めているのに石を 丸い石はパンに形が似ている。魚を求めているのに、蛇を 蛇はガリラヤ湖に生息する鰻うなぎ(律法によって食用を禁じられていた)の一種かもしれない。そんなものを子に与える親はいない。親は真実な愛をもって子の必要に応えようとするのである。

11 あなたがたは悪い者であっても： 特別に悪い人ということではない。天の父の真実と比べたとき、すべての人は、たとえ親切な親であっても、罪深いのである。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は下等なものに見いだしうる法則が、高等なものにさらなる蓋然性がいぜんせいをもって当てはまるといふ、ユダヤの一般的な論法。良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか 「良いもの」は6・31～33にあるような日常生活の必要を除外するものではないが、第一義的には、神の国の祝福という終末的な意味合いを持つものと言えよう。ルカははっきり「聖霊」(11・13)と記している。

12 ですから ここまで語られてきたことを大前提として、黄金律が語られている点が非常に重要。人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人に

しなさい この黄金律は消極的な形式(～するな)ではすでに知られていた。例えば紀元前後のユダヤ教師ヒレルは「あなたが憎むことを、あなたの仲間に行うな。これが律法の全体であり、その他のものはその注釈である」と教えた。しかしイエスが教えた積極的な形式(～しなさい)には、大きな意味の変化がある。キリストはまさに、積極的・自己犠牲的な愛によって律法を成就されたお方である。それゆえキリスト者の生き方も、常識的、律法的な地平から、律法の成就としての愛の地平へと飛翔するべきなのである。これが律法と預言者です。これとは別に、もう一つイエスが律法の要約として示したのが、「あなたの隣人となりびとを自分自身のように愛しなさい」(マタイ22・39)である(レビ19・18参照)。この7章の黄金律はそれと別物ではなく、少しニュアンスの違った解釈であると理解して良いだろう。自分のして欲しいことを他人にもすることこそが隣人愛なのであり、それは、神から真実の愛をもって愛されているのだという実感があつて初めて、人に与えうるものなのである。

参考文献 注解書 Hagner (Word), Hill (NCB), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

I列王3・16〜28

タイトル

ソロモンの知恵

暗唱聖句

神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見たからである。I列王3・28

目標

神様からの知恵によつて生きる者となる。

導入

(土屋開夫)

最近の小学生は勉強、大変みたいですね。英語やコンピュータも習ったり。今の世の中を生き抜くために、「スーパーこども」を育てようとしているそうです。

そういう学校のお勉強がよく出来ることも大切かも知れませんが、でもっと大切な知恵があるんです。それは「神様から与えられる知恵「神の知恵」です。それは、どういう知恵かと言うと、神様の前に何が良いことか、悪いことか、何が本当か、ウソか、今、何をするべきか、しないべきか、などを判断することが出来る知恵です。

今日出てくるソロモン王は、ダビデ王の息子の一人で、ダビデ王の後を継いでイスラエルの王になりました。でも王様って大変です。国を正しく治めなければなりません。

ん。そこでソロモン王は、イスラエルの国民を正しく治められるように、神様に知恵を求めました。神様はその祈りに答えて、ソロモン王に素晴らしい知恵を与えてくださったのです。

二人のお母さん

ある時、二人の女性がソロモン王のもとにやってきました。この二人は今で言うルームシェアみたいに同じ家に住んでいました。そして同じ頃にそれぞれ赤ちゃんを産みました。ところが夜寝ている間に、一人のお母さんは抱いていた小さな赤ちゃんの上に乗ってしまいました。ところが赤ちゃんはかわいそうに死んでしまいました。と自分の赤ちゃんを死なせてしまったお母さんは、死んだ自分の赤ちゃんを、もう一人の生きている赤ちゃんをこっそり入れ替えたというのです！

この二人のお母さんが「生きているのが私の子です。死んだのはあなたの子です。」「いいえ、死んだのがあなたの子です。生きているのは私の子です」と言い張るのです。いったい、果たしてどっちの言うことが本当で、どっちがウソなのでしょう？

神様から与えられた、ビックリする知恵

この時、きつとソロモン王は心の中で祈ったことでしょう、「神様、知恵を与えてください。真実を教えてください」と。そしてソロモン王は刀をもって来させ、「生きている子を二つに切り分け、半分をこちらに、もう半分をそちらに与えよ」と命じました。なるほど、赤ちゃんを半分ずつに分ければいいのか…えー?! そんなことをしたら赤ちゃんが死んでしまいます!

するとその赤ちゃんの本当のお母さんは叫びました。「どうか、その生きている子をあの女にお与えください。決してその子を殺さないでください」と。ところがもう一人のお母さんは言いました、「それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください」と。

この二人の言葉を聞いたら、どっちが本当のお母さんか、みんなにも分かりましたよね。そう、赤ちゃんを殺さないで、と叫んだ女性が本当のお母さんですね。ソロモン王は勿論、赤ちゃんを本当に殺すつもりはありませんでした。本当の心を知るためだったのです。

我が子を本当に愛する母親の愛の心と、悔しさと妬ましさからウソをついたり、人のものを奪おうとする罪の

心、それをちゃんと見分ける知恵を、ソロモン王は神様から与えられたのです。このソロモン王の判決を聞いた人たちは驚きました。「神の知恵が彼のうちにあって、さばきをするのを見たからである」(28)。

まとめ

ソロモン王は旧約聖書の箴言の多くの部分を書きましたが、その1・7に「主」を恐れることは知識の初め。」とあります。私たちの父なる神様は、何でも知っておられ、何でも出来る「全知全能」の神様ですね。この神様を信じている、そしておそれ敬って礼拝している…そのことがもつとも大切な知識、知恵だということです。

みなさんも毎日生きていく中で色々なことにぶつかろうでしょう。「あー本当に困った。一体どうしたらいいんだろう」。そんな時は慌てないで、恐れないうで、「神様、どうしたらいいでしょう。知恵を与えてください」と祈ってください。すると心が落ち着いてきて、やがて光が差すように神様からの知恵が与えられてきますよ。

♪主の教えを喜びとし♪ (プレイズ&ワッシュアップ21)

聖書 I列王3・16〜28 テーマ ソロモン王の知恵

序論

(鎌野善三)

今週は、「サムエルと王たち」の単元の3回目として、紀元前960年、若くしてダビデ王の継承者となったイスラエル王国3代目の王ソロモンに焦点をあててみよう。彼の知恵がどのようなものであったかを示す逸話が、今日の聖書個所に記されている。

一、公平にさばく知恵

こともあろうに、普通の人々ではなく、二人の遊女が王のもとにきたことに留意したい。長老や役人では解決できない難しい問題だったゆえに、王の最終判断が求められたのだろう。当時の社会にあつて、遊女は決して芳しい職業ではなかったにもかかわらず、しかも、このように最高権力者である王に直接訴えるシステムができていたことは驚きだ(これらの点では、江戸南町奉行だった大岡越前守の似たような裁判の話とかかなりの違いがある)。そして王は彼らの訴えを真剣に聞き、何ら差別す

ることなく公平に対処した。

二人の話を聞いたとき、王は、どちらがうそを言っているのか、その口調や表情である程度分かったかもしれない。しかし王は、主観的な判断で安易にさばきを下さなかった。正しく、公平にさばくために、知恵を用いたのである。

二、愛に基づく知恵

遊女にとつて、妊娠することは決して喜ばしいことではなかった。父親は不明なので一緒に住めず(だから家には彼女たちしかいなかった)、育児の経済的負担をどうするか、心配していたかもしれない。しかし二人は様々な困難を克服して、出産にまで至った。二人とも生まれた赤ん坊を愛していたはずである。だからこそ、一方の女は自分の不注意で赤ん坊を死なせてしまつても、あきらめきれずに、取り替えたのだ。しかしそれは赤ん坊を自分のもの、自分の所有物と考えることであり、正しい愛の姿ではない。

王が(生きている子を二つに切り分け、半分をこちらに、もう半分をそちらに与えよ)と命じたとき、本当の

母は、〈どうか、その生きている子をあの女にお与えください〉と叫んだ。赤ん坊が生きていてさえくれたら、たとい自分が育てることができなくても良いと思ったからだ。それこそが正しい愛である。逆に、〈それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください〉という女は、赤ん坊を物のように考えていた。万が一、この女が本当の親であつたとしても、彼女は赤ん坊を正しく育てることはできないだろう。王は、赤ん坊に対する母親の愛を信じて、このようなさばきをしたのである。

三、神から与えられた知恵

〈全イスラエルは、王が下したさばきを聞いて、王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見たからである〉。ソロモンの知恵は、彼自身から出てきたのではない。それは神から与えられたものだった。即位の直後、主が夢に現れたとき、彼は自分が「小さな子どもで、出入りする術を知りません」(7)と、その未熟さを認め、「自分のために長寿を願わず、自分のために富を願わず、あなたの敵のいのちさえ願わず、むし

ろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を願った」(11)。主がその求めに応じて知恵を与えられたからこそ、遊女であつても公平に、また彼らの中にある愛を信じて、さばくことができたのだ。

自分の無能を知り、神の力に信頼することこそが信仰である。ソロモンが生涯、この信仰を持ち続けたなら、イスラエルの歴史は違ったものになっただろう。しかし彼は、周囲の国々の王女たちを妻としたため、晩年、「その妻たちが彼の心をほかの神々の方へ向けた」(11・4)。政略結婚は、信仰を否定することだったのである。

結論

ソロモンの知恵は確かにすばらしいものだった。しかし主イエスは、「しかし見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります」(マタイ12・42)と仰せられた。確かに、「キリストは、私たちにとって神からの知恵」となれた(1コリント1・30)。主イエスを信じる者こそ、ソロモンにまさる知恵者である。謙遜にこの知恵を求め続けようではないか。

研究資料

(石田高保)

「ソロモンの知恵」と人の口にものぼるように、ソロモンが並外れて知恵ある王であったことは、一般的にも知られています。それが神話化されてソロモンは不思議な指輪を持っており、どんな動物とも話しができたという伝説も生まれたほどのです。今日の個所は、彼に授けられた神の知恵を具体的に伝えるエピソードです。彼は王なる裁判官として、おびただしい知恵深い判決を下したことでしよう。ソロモンの手によると言われている箴言しんげんにも、その賢明さがじゅうぶん表されています。

テキスト

16 二人の遊女が王のところに来て、その前に立った王の前とは、いわば最高裁判所です。地方で長老や役人たちが司る下級裁判所では取り扱いかねる難題であったことがうかがえます。遊女でも王に訴えることができたほど裁判はすべての人に開かれていました。イスラエルの王は、士師時代の「さばきづかさ」が発展したもので、長老たちの助言を得ながら、行政、司法、軍事を一元的に掌握しており、責任を主なる神に負っていました。

18 家には私たちのほか、だれも一緒にいた者はなく、私たち二人だけが家にいました。当事者である二人以外に第三者の目撃者や証人のいない事例なので、裁判は困難を極めます。

20 このはしためが眠っている間に、私のそばから私の子を取って自分の懐ふところに寝かせ、死んだ自分の子を私の懐に寝かせました。自分が見ていないにもかかわらず、相手の仕業であると決めつけているのは、母親としての直感が働いたからでしょう。

22 女たちは王の前で言い合った。二人の口論が激しさを増し、第三者にとつては当事者以外に証人がいない場合、ふつうは迷宮入りです。ところがソロモンにはそれを見分ける力がありました。

24 王が「剣をここに持って来なさい」と言った。当事者の言葉だけでは判断できないと見た王は、思いがけない態度に出ます。その場にいる誰にでも分かる方法で判断しようとした。

25 生きている子を二つに切り分け、半分をこちらに、もう半分をそちらに与えよ。ソロモンは子どもに對する母親の気持ちを察したのでしよう。この言葉が事の真偽

に決着をつけることになります。神の知恵を授けられたソロモンの面目躍如です。

26 すると生きている子の母親は、自分の子を哀れに思って胸が熱くなり 直訳としては、「彼女のほらわたしは熱くなった」。実の母は、わが子が殺されるくらいなら相手の女に渡してでも生きてくれるほうがましだ、という焼けるような思いで王に申し出ます。いっぽう相手の女は、それを私のものにも、あなたのものにもしないで、断ち切ってください と冷たく言い放ちます。自分の子でないから死んでもかまわないという意味です。ソロモンは、このような二人の反応の違いをあぶり出すことによって本当の母親を見抜くことができました。まさに「王の唇には神々しさがある。さばくときに、その口は神の信頼を裏切らない」(箴言16・10)とあるとおりです。

28 全イスラエルは、王が下したさばきを聞いて、王を恐れた これは人間の能力を超える判決であったので、一同はソロモンに神の知恵が授けられていることを悟りました。またどんな悪事もソロモンの前ではあばかれてしまうという神への畏れを抱きました。神の知恵が彼の

うちにあって、さばきをするのを見たからである ソロモンは事実、状況や前後関係に対する靈感された洞察力をいただいていたと言えるでしょう。新約的に言えば、これは御霊の賜物の「知識のことば」に当たるかもしれませんが(1コリント12・8)。正しい裁判をすべき王として、「聞き分ける心をしもべに与えてください」(9)、「正しい訴えを聞き分ける判断力」(11)が、彼の求めに従って与えられたと見るべきでしょう。そのほか、ソロモンの知恵に関する聖書の記述は以下のとおりです。「神は、ソロモンに非常に豊かな知恵と英知と、海べの砂浜のように広い心を与えられた。ソロモンの知恵は、東のすべての人々の知恵と、エジプト人のすべての知恵にまさっていた。：ソロモンは三千の箴言を語り、彼の歌は一千五首もあった。：彼の知恵のうわさを聞いた世界のすべての王たちのもとから、あらゆる国の人々が、ソロモンの知恵を聞くためにやって来た」(4・29、30、32、34)。ソロモンならずとも、主に頼って生きるための知恵を求めるなら、どんなに自信がなくてもタイムリーに授かることができます。

参考図書 『ティンデル聖書注解』、『実用聖書注解』。

聖書

1列王12・1～19

タイトル

王国の分裂

暗唱聖句

怒りを遅くする者には豊かな英知がある。／気の短い者は愚かさを増す。

箴言14・29

目標

思いやりのある優しい言葉を使う者となる。

導入

(土屋開夫)

皆さんが行っている幼稚園や小学校の先生は、優しいですか、それとも怖いですか？

先生が子どもの頃、保育園の担任の先生はとても優しい先生でした。その「めぐみ先生(仮名)」が私も大好きで、毎日楽しく保育園に行っていました。ところがある時、めぐみ先生が風邪でお休みになり、しばらくの間、代わりに怖くて厳しい「鬼子(おにこ)先生(仮名)」が担任になりました。鬼子先生は言いました、「言っておくけど、私はめぐみ先生みたいに甘くないよ。」次の日、私は「ヤダー、行きたくない」と泣き叫びました。

皆さん、どうですか？ 誰だって、怖い人より優しい

人の方がいいですよ。怖い人からは離れたくなります。逆に優しい人には近づきたくなります。今日、登場するレハブアム王様はどっちだったのでしょうか？

国民の求め、願い

レハブアム王様は、お父さんのソロモン王様の後を継いでイスラエルの王様になりました。さあ、これからどのように国の人々を治めればいいのでしょうか？

ソロモン王様の時、人々はたくさん税金を納めなければならなかったり、辛い労働をさせられて、苦しんでいました。ある時、人々はレハブアム王様の元にやってきて、このように言いました、「あなたの父上であるソロモン王様は、私たちに重たい重荷を負わせられました。でも息子であるあなたが、その重荷を軽くしてください。なら、私たちはあなたに仕えます」と。つまりソロモン王様は厳しかったけれども、あなたは優しくして下さい、と願ったのです。

二つの語りかけ

レハブアム王様は、どうしたものと、まず、長年ソ

6月

30日 礼拝メッセージ例

ロモン王様に仕えてきた僕たちに相談しました。すると彼らはこう言いました、「もしあなたが：親切なことをかけてやるなら、彼らはいつまでも、あなたのしもべとなるでしょう」(7)。彼らはソロモン王様の元で国民が苦しむのを見てきたのでしょうか。「このままでは国民の心が離れてしまう」と。

次に、レハブアム王様は、自分の子分のような若い僕たちにも相談しました。彼らは国民に「こう言いなさい」と勧めました、「私はおまえたちのくびきをもっと重くする。：」(11)と。

皆さんの心にも、神様の語りかけと悪魔の語りかけの両方を感じる事はありませんか？ その時、大事なものは、心を静かにしてお祈りをし、神様に聞くことです、「神様、私はどうすればいいでしょうか？」と。

もし神様に祈らないで、「なんかムカつく！」と怒りの気持ちで行動したり、焦って慌てて行動すると、大失敗してしまいます。

残念ながら、レハブアム王様は愚かな方を選んでしまいました。人々の重荷を軽くし、優しい王様になるよりも、人々を更に苦しめ、威張り散らす王様になる事を選

んだのです。

その結果、人々は怒り、多くの国民がレハブアム王様から離れていきました。そして残念な事に、今まで一つだったイスラエルの国は、北(10部族)と南(2部族)に別れてしまったのです。

恵み深いイエス様のように

自分に当てはめて考えてみましょう。皆さんは幼稚園や小学校で、自分より年下の子に、偉そうに威張る事はありませんか？ あるいは弟や妹に。

大事な事は、いつもイエス様をお手本にする事です。イエス様は王の王、最高の王様ですが、子どもにも、女の人にも、病気の人にも、罪のある人にも優しく接し、恵みに恵みを加えられました。

私たちもイエス様の恵みと優しさをいただいて、周りの人に接しましょう！

♪愛をください♪ (イン67、イン新80、ホ78)

聖書 I列王12・1～19 テーマ 王国の分裂

序論

(石田高保)

自分と異なる意見を受け止め、議論を良い結論に導くことは、謙遜と寛容と忍耐を要するものです。

一、反対意見を退ける危うさ

ソロモン王の後半生は太平に馴れ、宮廷生活も派手になり、放漫財政のつけを重税で補ったため、民衆が反発するようになります。そこでイスラエル十部族の長老たちは、レハブアムに代替わりすると先代への不満から、ヤロブアムを王に担いで独立しようとなりました。レハブアムのところに、ヤロブアムと長老たちがやってきて、労役と税金を軽くしてほしいと願ひ出しました。もし要求がはねつけられたら、こちらは自立する口実になると計算していたのです。するとレハブアムはまず父ソロモンに仕えた老臣たちに相談しました。彼らは王に、代表者たちの願ひを受け入れなければ、十部族は離反すると警告します。彼らは長い統治経験から、十部族の不満が高じており、彼らをむげに扱うなら国が分裂しかねないと

予想していました。まずは長老たちの要望に耳を傾け、寛容な政治を行うことが肝要だと答えます。

ところがレハブアムはその意見が気に入らなかったのか、同世代の若い側近たちに相談します。自分の考えに賛同してくれそうな家臣に同調してもらおうとしたのでしょう。実は最初から重臣に聞く耳を持っていなかったのです。すると側近たちはソロモン王の時よりもっと労役と税金を重くすべきだと進言します。なぜなら王が民の要求にすんなり応えれば権威が下がり、見くびられるとでも考えたのでしょう。不幸なことにこの進言がレハブアムの気持ちを固めました。彼らは老臣の経験知を軽んじました。そこで王は彼らの意見とは正反対の決断を下します。しかも高圧的、挑戦的なものの言い方をし、十部族の長老たちをすつかり怒らせ、王国の分裂を決定づけてしまったのです。

この一度の判断が王国を数百年に及ぶ分裂に導くことになろうとは、レハブアムやその側近たちも想定外のことだったでしょう。分裂の直接の原因をつくったのは彼らですが、もとはと言えばソロモン王が徐々に偶像礼拝に傾き、もはや引き返せないところまで行つたとき、主

が預言しておられたことです(11・11)。近くは主が預言者をおしてヤロブアムに伝えられていたことでもあります(11・31)。それらの預言がレハブアムと側近たちの不敬虔と経験不足からくる軽率さや自己過信と絡み合っ
て、はからずも成就してしまいました。

二、反対意見を聞くという知恵

若い人が年配者の考え方を古臭いと考え、年配者は若い人の考えを未熟なものと決めつけやすいことは古今東西を問いません。「今の若い者は…」という言葉は古代から変わりません。けれども年配者の言うことだけを聞いていたら社会に変革は起きませんし、若い人の言うことだけを聞いていたら社会は不安定になるでしょう。保守的な要素も、進歩的な要素も社会にはバランスよく必要です。たとえば年配者が自分の地位と立場にものを言わせて若い人の意欲やビジョンを抑えつけるとしたら、それは老害というものです。そのようなリスクはあるものの、年配者の考えが常に正しいわけではないのですが、若い人より失敗の多い分、経験知も多く、おおむね生きる知恵に富んでいると言えます。ですから若い人はそのことのゆえに年配者を尊敬し、耳を傾けるという知恵を

身につけるべきでしょう。「父親に対するように」(1テモテ5・1)。普通の社会生活では自分が100パーセント正しくて相手が100パーセント間違っているということは滅多にありません。ひょっとしたら自分にも誤りがあるのではないかと自省し、人にも相談するという謙虚さが欲しいものです。またそれを仲間内に検証してもらおうだけでなく、自分より経験のある人に相談すべきでしょう。そのような人間関係を持つているなら、大きな判断ミスから免れるでしょう。

結論

誰でも自分のアイディアや主張や計画を持っており、その実現を誰にも邪魔されたくないのです、人のアドバイスや忠告に耳を傾けることは簡単ではありません。また自分一人で成功したいという野心が潜んでいるなら、なおさらです。しかし自分の邪魔をするかのように見える人の言葉も受け止め、議論を深める過程で、創造的なアイディアに至ることがあります。使徒の働き15章のエルサレム会議がそうであつたように、クリスチャンどうしの会話や教会のミーティングの中に、人知を超えて聖霊が最善に導いてくださるのを見ましょう。

研究資料

(金井由嗣)

イスラエルの王権思想

古代オリエント世界では、一般に王は絶対権力を持つ独裁者であった。しかしイスラエルにおいては、主なる神が王であるとの思想のもとで、王権は神との契約によって制限され、神への信仰に忠実な王が理想とされた。サムエル記はそのような王権思想のもとに書かれており、列王記もその思想を踏襲している(ポールドウィン)。無制限な王権を良しとしない思想はまた、神が顧みておられる「弱い者、貧しい者」を保護することを王に要求する根拠ともなる(ブルッゲマン)。

ソロモンの宮廷の持つ国際的な性格、とりわけ異国出身の妻たちによって偶像礼拝とともに入り込んだオリエント的王権思想は王権の拡大を招き、過重な労役に対する不満が王と民の関係を悪化させていた。同様の問題は、この後もイスラエルの歴史の中で繰り返される。

テキスト

1 レハブアムはシェケムに行った。ソロモンの死によって王位を受け継いだレハブアムだが、十二部族すべ

ての承認を得るために長老たちの集会に出る必要があった。部族連合体に推されて王位に就くというダビデ以来の伝統(Ⅱサムエル5・3)がまだ生きていた。ソロモンの晩年に北方十部族との関係が悪化していた(Ⅺ・26以下)ことも背景にあったと考えて良い。彼を王とするために、十二部族の長老たちはレハブアムを王とすることに同意していたが、無条件ではなかった。

3 人々は：彼を呼び寄せた。ソロモンに追放されたヤロブアムを交渉の代表とすること自体が、長老たちの交渉が友好的なものではなかったことを示している。

4 父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびきを軽くしてください。そうすれば、私たちはあなたに仕えます。ソロモンの晩年には、税・労役・軍役が民の重い負担となっていた。その軽減がレハブアムの王位を承認するための条件であり、民の代表としては当然の要求であった。

6 ソロモンに仕えていた長老たち 経験を積み、民の苦しみも理解している大人たちの助言は適切だった。

8 自分とともに育ち、自分に仕えている若者たち レハブアムは即位した時すでに41歳であり(Ⅽ4・21)、成人

としての自負もあつて長老たちの助言を聞き入れなかった。彼は物心ついた時から王子として育っていて、民の労苦に共感することができなかったと思われる。彼は自分と同世代の、王権についての思想と感覚を共有する家臣たちの不適切な助言を採用した。

9 この民に何と返答したらよいと思うか レハブアムの家臣への二つの問いかけ(6節と9節)は、微妙にニュアンスが異なっていた。6節では「どのように(how)」との疑問詞と不定法で一般的な答え方について尋ねているが、9節では疑問詞「何を(what)」と一人称複数の動詞を用いて「われわれはなんと返答すればよいか」と、レハブアム自身の意思を暗示する尋ね方になっている(英訳ESV等参照)。長老たちの答えに満足しなかったレハブアムの意向は、若い家臣たちに尋ねる前にすでに固まっていたことが伺える。

10 わたしの小指は父の腰よりも太い ソロモン以上に強大な王権の主張と、より重い労役の要求であった。王権は強大で独裁的であるべきとの古代オリエント的王権思想が見て取れる。それはイスラエルの伝統とは明らかに相反する思想だった。若きソロモンが即位した時の謙

遜と神への恐れ(3・4・15)は、レハブアムには見られなかった。

15 「主」がそう仕向けられたからである レハブアムの愚かな答えは彼自身の性格と思想から出たものだが、同時にそのような愚かさも神の計画の中で起きたことを聖書は教えている。根本的にはソロモンの晩年の偶像礼拝がこの事態を招いたのであった。

16 イスラエルよ、自分たちの天幕に帰れ 本日の箇所では、「帰る」(へシューブ)という動詞が繰り返し用いられ、キーワードとなっている。ヤロブアムはエジプトから帰って王位に就き(20)、レハブアムは全イスラエルの王となることに失敗してエルサレムに逃げ帰った(18)。それは民の要求に対して王が「返した」言葉に対する民の「返答」であった。神の計画の中であつても、人は自分の行為の結果を引き受けなければならない。

参考図書 ワイズマン(ティンデル)、ネルソン(現代聖書注解)、舟喜信(新聖書講解シリーズ)、油井義昭「王」(『聖書神学事典』)、ボールドウィン(ティンデル)、ブルツゲマン(現代聖書注解)

牧羊ひろば



苦小牧小羊伝道所 教会学校

苦小牧小羊伝道所の教会学校は二〇一〇年に拓勇レインボーシップとして拓勇福祉会館で始まりました。これはそれまで長い間、札幌羊ヶ丘教会で苦小牧の人々の救いのために祈り、その中から神が導いてくださったのです。羊ヶ丘教会信徒が毎月2回土曜日に、会館に来て近隣の拓勇小学校の児童を対象に始めました。多いときは40名を越える子どもたちが来ました。二〇一五年に現在の苦小牧小羊伝道所が開所され、拓勇レインボーシップを継続しました。二〇二〇年には伝道師が常駐するようになり、毎週開催するようになりました。しかし、コロナ期間でもあり、毎回1人という日が続きました。二〇二三年6月から小学校校門でチラシの配布が再開できるようになりました。10名前後の子どもたちが来る日もあります。特にイースターと、クリスマスには親子レインボーシップを開催しています。家族で来ることにより保護者が安心して送り出せる苦小牧レインボーシップでありたいです。この集会は10時30分から12時までです。最初の30分は賛美と主の祈り、聖書メッセージがあります。後半はお楽しみ会です。工作、ゲーム、クイズ、クッキング等です。各学年が満遍なく来て、継続することが課題です。教会の祈りが、今もレインボーシップの働きを推し進める力の源であることを日々、感じています。

(関 雅人)



シャボン玉2023年10月



生誕劇2023年12月

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<https://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

おわりに

『牧羊者』二〇二四年度I巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。

巻頭言は台湾宣教師の伊藤初師が執筆してくださいました。教師養成講座は二〇〇九年度II巻とIII巻に掲載された後藤真師の原稿に、後藤真師がこのたび新たに一部修正加筆されたものを、編集して再掲させていただきます。「牧羊ひろば」では苦小牧小羊伝道所のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

メッセージ例	飯田勝彦師	和田牧子師	今田雅子師
聖書講解	土屋開夫師	後藤真師	大頭眞一師
研究資料	福井文彦師	鎌野善三師	中島啓一師
	宮澤清志師	辻林和己師	石田高保師
ワーク	金井由嗣師	小平徳行師	宇野真佑美師
(A)	鎌野幸師	吉田美穂師	竹崎光則師
(B)	栗川剛士師	三輪直子師	野勢かほる師
(C)	上森恭子師	山下大喜師	田中裕明師
	勝田幸恵師	八幡直人師	
中高科へのヒント	石田高保師	三輪正見師	後藤健一師
子ども聖書日課	田中愛子師	金田ゆり師	小野淳子師
フラッシュカード	後藤栄子師	柴田福音師	丹羽遥姉
み言葉カード・イラスト	山本あん姉	柴田福音師	丹羽遥姉
	後藤栄子師		
ワープロ打ち込み	山本あん姉		
校正	後藤健一師	後藤健一師	
	中島啓一師		
また、事務作業・発送の教団事務所の光田隆代師はじめ佐藤由香姉他姉妹方・組版の松木共栄印刷、印刷のプリントバックに心から感謝いたします。(後藤健一)			

また、事務作業・発送の教団事務所の光田隆代師はじめ、佐藤由香姉他姉妹方、組版の松木共栄印刷、印刷のプリントバックに心から感謝いたします。(後藤健一)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇二四年度 I巻

二〇二四年四月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三-三-一九

印刷所 株式会社プリントバック
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511

印刷所 株式会社プリントバック

* 聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会 許諾番号 4-2-1750号